

茨城県笠間市

# 宍戸城跡

—店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012

(有)毛野考古学研究所

茨城県笠間市

# 宍戸城跡

—店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012

(有)毛野考古学研究所

## 例　言

1. 本書は、店舗建設工事に伴い実施された、宍戸城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導を受けて、有限会社毛野考古学研究所が実施した。
3. 遺跡の所在地・調査面積・調査期間は以下の通りである。

所 在 地	茨城県笠間市平町字殿町 83-1, 84-1, 85-1, 86-1
調 査 面 積	400 m <sup>2</sup>
発掘調査期間	平成 23 年 11 月 17 日～平成 23 年 12 月 2 日
整理調査期間	平成 23 年 12 月 14 日～平成 24 年 5 月 31 日
4. 発掘調査及び整理調査は、有限会社毛野考古学研究所 有山徑世が担当した。
5. 本遺跡に係る遺構測量に關しては、有限会社毛野考古学研究所 小出拓磨が担当した。
6. 遺物実測については、本製品を有限会社毛野考古学研究所 上井道昭が、その他を有山が担当した。遺物写真については同研究所 上井 太・上井が撮影した。
7. 調査によって得られた資料は、笠間市教育委員会が保管・管理している。
8. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記してここに感謝を申し上げます。(敬称略・順不同)

川崎純徳 能島清光 稲田義弘 茨城県教育庁文化課 笠間市教育委員会  
株式会社セブン-イレブン・ジャパン 株式会社柴建築設計事務所  
J T 空撮 有限会社スマヤ測量 有限会社カワヒロ産業 株式会社キガ
9. 本書の作成にあたっては、池内麻美・磯 洋子・永井祐二・永島美和子・伴場りく・山下奈邦子の協力を得た。
10. 発掘調査の参加者は以下の通りである。

岩田時彦・鈴木 浩・高田幸江・高安幸且・豊島英則・根矢 稔・幅 増男・丸山麻由美・武藤瑞良

## 凡　例

1. 本書で使用した略記号は、以下の通りである。

SB : 挖立柱建物跡 SA : 柱穴列 SD : 構跡 SE : 井戸跡 SK : 土坑 P : ビット S : 石
2. 本書掲載遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、各挿図中にスケールを付した。
3. 遺物観察表中の計測値は( )が復元値、〔 〕が残存値を示す。単位はcm、gである。
4. 掲載した遺物には、遺構毎に番号を付しており、本文・表・挿図・図版ともに一致している。
5. 挿図中のトーン  は、油煙の付着範囲を示す。その他は各挿図中に示してある。
6. 土層観察と遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2006)を使用した。

## 目 次

例言  
凡例  
日次

### 第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
<b>第2章 位置と環境</b>	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
<b>第3章 遺跡の概要と基本層序</b>	
第1節 遺跡の概要	5
第2節 基本層序	6

<b>第4章 検山された遺構と遺物</b>	
第1節 挖立柱建物跡	9
第2節 柱穴列	12
第3節 溝跡	15
第4節 井戸跡	22
第5節 土坑	23
第6節 ピット	25
第7節 盛土整地層出土遺物	30
第8節 遺構外山上出土遺物	30
第5章 まとめ	31
<b>写真図版</b>	
抄録	

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の道路	3
第2図 宍戸城想定図と測量区位図	4
第3図 基本層序	6
第4図 調査区全体図（1）	7
第5図 調査区全体図（2）	8
第6図 SB01出土遺物	9
第7図 SB01	10
第8図 SB02A・B	11
第9図 SB02A・B出土遺物	11
第10図 SA01	12
第11図 SA02出土遺物	12
第12図 SA02	13
第13図 SA03	13
第14図 SA04出土遺物	14
第15図 SA04	14
第16図 SD01	15
第17図 SD01出土遺物	15
第18図 SD02	16
第19図 SD02出土遺物（1）	18
第20図 SD02出土遺物（2）	19
第21図 SD03	20
第22図 SD03出土遺物	21
第23図 SE01	22
第24図 SE01出土遺物	23
第25図 SK01	23
第26図 SK01出土遺物	24
第27図 SK02	24
第28図 SK02出土遺物	25
第29図 ピット（1）	26
第30図 ピット（2）	27
第31図 ピット（3）	28
第32図 ピット出土遺物	28
第33図 盛土整地層出土遺物	29
第34図 遺構外出土遺物	31
第35図 武家屋敷数軒想定図	32

## 表目次

表 1 穴戸城跡層の中・近世遺跡一覧	3
表 2 SB01出土遺物観察表	9
表 3 SB02A・B出土遺物観察表	11
表 4 SA02出土遺物観察表	12
表 5 SA04出土遺物観察表	14
表 6 SD01出土遺物観察表	16
表 7 SD02出土遺物観察表	17
表 8 SD03出土遺物観察表（1）	21
表 9 SD03出土遺物観察表（2）	22
表 10 SE01出土遺物観察表	23
表 11 SK01出土遺物観察表	24
表 12 SK02出土遺物観察表	25
表 13 ピット計測一覧表	26
表 14 ピット出土遺物観察表	28
表 15 盛土整地層出土遺物観察表	30
表 16 遺構外出土遺物観察表	31

## 写真図版目次

写真図版 1 宍戸城跡の位置と周辺の地形  
調査区位置  
写真図版 2 調査区全貌、1区全貌、2区全貌  
3区全貌、4区全貌  
写真図版 3 SB01、SB01-P1、SB01-P2、  
SB01-P2、SB02A・B、  
SB02A-P1、SB02A-P2  
写真図版 4 SB02B-P1、SM02-P1、  
SA03・04、SA03-P1 上層断面、  
SA03-P3、SM04-P1

写真図版 4 SA04-P1、SA04-P3  
写真図版 5 SD01、SD01上層断面、  
SD02、SD02上層断面、  
SD02下層遺物出土状況、  
SD02上層遺物出土状況近景、  
SD02下層遺物出土状況、  
SD02下層遺物出土状況近景、  
SD03、SD03遺物川口状況近景、  
SE01、SE01某箇断面、  
SE01近景、SE01石組近景

写真図版 6 SE01、SK01土層断面  
写真図版 7 SK02、SK02遺物出土状況、  
P04、P04断面割り、  
P16土層断面、P23、  
P26土層断面、P27「層断面  
写真図版 8 山上遺物（1）  
写真図版 9 出土遺物（2）  
写真図版 10 出土遺物（3）

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

平成21年11月24日付で株式会社セブン・イレブン・ジャパンより、笠間市平町地内における「埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて」の照会を笠間市教育委員会に提出した。開発予定地は、周知の遺跡「宍戸城跡」が所在することから、平成21年11月30日付けで試掘調査が必要である旨が回答された。試掘調査は、笠間市教育委員会が茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏に依頼して、平成23年3月11日に実施し、遺跡の所在が確認された。

株式会社セブン・イレブン・ジャパンは茨城県教育委員会に対して、平成23年5月27日付けで文化財保護法第93条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包戻地の発掘について通知した。茨城県教育委員会は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と決定し、平成23年7月22日付けで工事着工前に発掘調査を実施するよう通知された。

これを受け、株式会社セブン・イレブン・ジャパンは有限会社毛野考古学研究所に調査を依頼した。株式会社セブン・イレブン・ジャパン・笠間市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所は三者協定を締結し、試掘調査の結果に基づき、平成23年10月7日付けで文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会へ提出し、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成23年11月17日から平成23年12月2日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査の方法と経過

発掘調査は平成23年11月17日から12月2日まで行った。調査域の現況は水田で湧水があるため、表土除去後、調査区画にそって遺構認面より深い側溝を人力にて掘り、適宜水中ポンプを使用して場外に向けて水抜き作業を行いながら調査を行った。調査区は4ヵ所に分かれ、1～4区と呼称した（第4図）。遺構測量の縮尺はS-1/20を基本とした。遺構の撮影は適宜行い、35mmモノクロ、カラーリバーサルの各フィルムとデジタルカメラを使用した。発掘調査の経過は以下の通りである。

11月期 17・18日：表土掘削を行う。19日：基準点測量。排水用の側溝を掘削。21日：遺構確認作業を行い、土坑・柱穴・井戸跡・溝跡を検出した。22日：溝跡の調査を開始する。23日：溝跡の調査を継続する。24日：前日の降雨により調査区が水没し、1区の西壁は1号溝内に崩落していた。調査を中止し、水抜き作業を行う。25日：溝跡の調査を継続し、土坑・ピットの調査を開始する。28・29日：土坑・ピット及び井戸跡の調査を行う。30日：空撮に向けて全体清掃を行う。

12月期 1日：ラジコンヘリコプターによる空撮を行う。終了後、各遺構の光掲写真撮影及び測量を行う。2日：すべての遺構調査を完了し、茨城県教育委員会文化課の視察を受ける。埋め戻し及び器材を撤収し、発掘調査を終了する。

その後、遺物発見届・保管証などの発掘調査終了書類を関係機関に提出し、整理作業に着手する。整理調査は、平成23年12月14日から平成24年5月31日まで行った。遺物洗い・注記・接合、図面・写真整理へと進め、調査資料を分析して報告書としてまとめた。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

宍戸城跡の所在する笠間市は、平成18年3月に笠間市・友部町・岩間町の1市2町が合併して総面積240.27km<sup>2</sup>の新たな市として誕生した。茨城県のほぼ中央部に位置し、北部は城甲町、桜木町、西部は桜川市、東部は水戸市、茨城町、南部は右岸市、小美玉市に隣接している。笠間市の地形を概観すると、山地及び丘陵、台地、沖積低地に大別される。

北部は八溝山地が久慈川、那珂川等の河川により分断されてきた鶏足山塊の末端にあたる。その周縁の丘陵地帯は友部丘陵と呼ばれ、標高50～90mで広い平坦地を残している。丘陵を構成する友部層は更新世の海成砂礫層で上層に関東ローム層をのせており、南関東の多摩面に対比される。一方、中央から南東部は標高30～40mの入洗方面にまで及ぶ東茨城台地が位置する。基盤となる第三紀層は三和層上部層と呼ばれ、おもに砂層によって構成され上層に関東ローム層をのせている。東茨城台地北側では友部丘陵を水源とする涸沼前川が北西から南東へ、中央部では国見山付近を水源とする涸沼川が東流している。これらの河川は流域に広大な沖積低地を発達させ、豊かな水田地帯となっている。

宍戸城跡は、これらに囲まれた小規模盆地を呈す新市域の中央やや東寄りに位置し、笠間市平町（旧西茨城郡友部町大字平町）に所在する。今回の調査区は、東流する涸沼川を南に臨む標高25mの沖積地上に立地しており、現況は水田である。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する旧友部町域には、旧石器時代から近世に至るまで多くの遺跡が分布している。それらについて、茨城県教育財団発行の文化財調査報告第256集『新善光寺跡 宍戸城跡』に詳しい。詳述はそちらを参照していただき、本報告では遺跡の主な時代である中・近世について概観する。

平安時代末期、旧笠間市・旧峯間町域を含む涸沼川流域一帯に、平賀幹が寄進したと推定される九条家領什国小鶴荘が成立する。後に源氏が政権を握ると、源頼朝の重臣八田知家が常陸守護職に就き、四男家政がこの地を領した。家政が宍戸氏を称したことから、この地域は宍戸荘とも呼ばれるようになる。家政は建仁3(1203)年に宍戸城を築城し、寺を13カ所創建するなどした。宍戸城は山尾城ともいい、現在の新善光寺跡(2)の所にあったともいわれている。宍戸氏の居館は古館(3)にあったと考えられているが、宍戸氏の菩提寺の新善光寺と同一台地上の山尾館跡に比定する向きもある。

宍戸氏は本宗の小田氏<sup>1)</sup>と共に常陸南部を治めていき、戦国時代15代義利の時には筑波四十八館の旗頭となり、6万7000石を領するまでになった。しかし、その後は常陸北部に勢力を誇っていた佐竹氏と常陸統一の過程で争うことになる。この結果、宍戸氏は佐竹氏の麾下に属すこととなり、文禄4(1595)年には知行6730石で真壁郡海老ヶ島城(筑西市、旧真壁郡明野町)に転封させられる。

小田・宍戸一族は佐竹氏や江戸氏<sup>2)</sup>に対抗するため、宍戸城本城の周囲に多くの城郭を築いた。本遺跡の南東方向には湯崎城跡(28)や住吉城跡(25)があり、長尾路城跡(30)と共に宍戸城の山城的役割を担っていた。北方に位置する市原城跡(9)や御城遺跡(10)も同様に、小原から笠間への道筋における重要な砦として築かれた。また、北東には里見氏<sup>3)</sup>の居城とされる小原城跡(7)が、東南には永享12(1440)



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

表1 穴戸城跡周辺の中・近世遺跡一覧

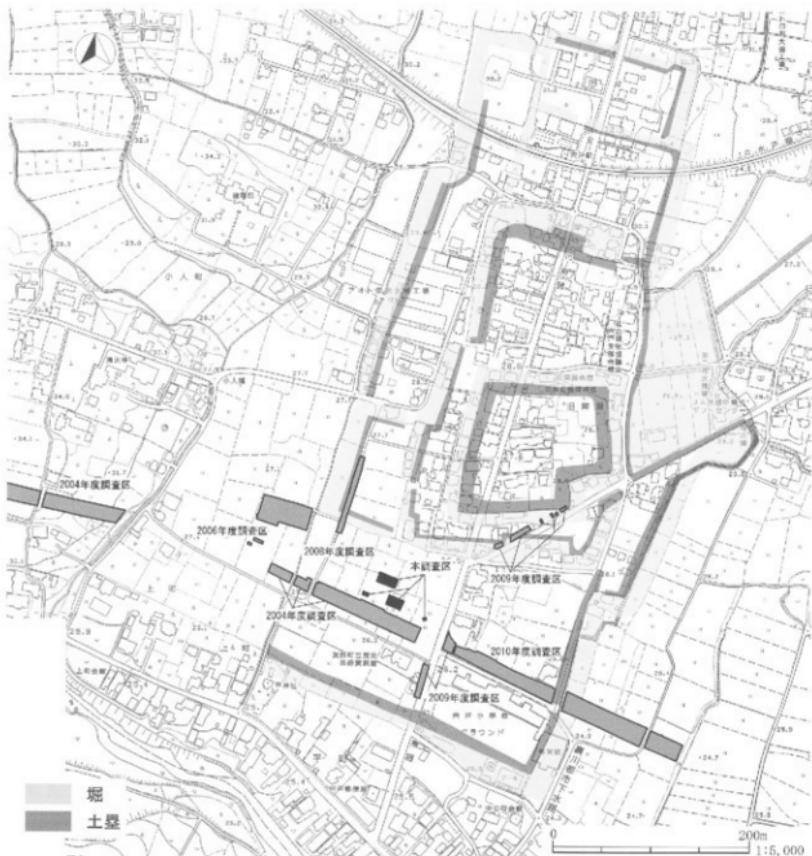
No.	遺跡名	主な遺構・時代
1	穴戸城跡	城郭、町指定史跡（土塁のみ） (中・近世)
2	斯波寺寺跡	伽藍（中世） (山形跡)
3	吉野院	伽藍（中世）
4	大日山古墳群	塚（古墳）
5	香取坂	坂場遺跡
6	四十八塚	圓墳群（中世）
7	小原城跡	城跡（中世）
8	五平古墳群	塚（近世）
9	市川城跡	城郭（中世）
10	御前池跡	城郭（中世）
11	丹後櫻古墳	塚（近世）
12	大穂古墳	塚（近世）

No.	遺跡名	主な遺構・時代
13	北山遺跡	塙（近世）
14	完全な後遺跡	中世・鎌倉・室町・江戸時代
15	上知賀田遺跡	丸薙地（中世）
16	下知賀田遺跡	丸薙地（中世）
17	高島台古墳群	塚（近世）
18	坂の上遺跡	環状塁（近世）
19	古塗入遺跡	削断、道型跡（中世）
20	当寧遺跡	遺跡（中・近世）
21	上郡遺跡	築之条（中世）長峰城跡（推定）
22	原小畠遺跡	小堀氏塙跡（推定）
23	佐久山遺跡	佐久氏塙跡（伝）
24	大宮山遺跡	小野交通（中世）
25	佐吉瀬跡	塙跡（中世）

No.	遺跡名	主な遺構・時代
26	万葉塙	経塙（中世）
27	千葉塙	経塙（中世）
28	勝幡城跡	城郭（中世） 町指定史跡（本郭跡のみ）
29	聖塙	塙（近世）
30	赤鬼跡遺跡	城跡（中世）
31	久保塙群	塙5基、土塁1基、護石3基（近世）
32	五方塙古跡	京阪電東山線遺跡 遺跡跡、井戸（近世）
33	西原塙	塙（中・近世）
34	井丸遺跡	夏木通室、南堀通片出土 (中・近世)
35	沟原遺跡	塙跡塙、塙（中世）
36	東原製塙跡	製糞跡（近世）

年の結城合戦で武功をあげた横田綱利が居を構えた長峰城跡の推定地とされる上郷遺跡（21）があり、両袖にピット列が並ぶ溝2条が検出されている。

宍戸氏転封後、この地は佐竹氏の直轄領となるが、関ヶ原の戦いで中立の立場を維持した佐竹氏は、幕府の命により慶長7（1602）年、減封の上で秋田へ移封される。宍戸には入れ替わりで秋田実季が5万石で入封し、宍戸藩が成立する。宍戸城が近世城郭として整備されるのはこの時期である。実季の跡を嫡子の俊季が継ぐものの、正保2（1645）年には5000石加増されて福島県三春へ国替えとなり、この地は幕府の直轄領へ移行した。43年間機能した城は廃城され、武家屋敷も取り壊されてその大部分は水田となった。天和2



第2図 宍戸城想定図と調査区位置図（1/5,000『茨城県教育財團文化財調査報告 第256集』をもとに作成）

(1682) 年になると、徳川光開の弟の松平頼雄が宍戸領のうち1万石をもって再び宍戸藩を立藩し、以後松平氏が明治維新まで支配することとなる。松平氏は宍戸城の主郭を利用して陣屋を築くものの、本格的な築城はなされず、水田化した武家屋敷が再び城下に組み込まれることはなかった。

宍戸城跡の南限の堀と潤沼川の間には笠間街道が通り城下集落が形成され、現在もその町並を残している。また、大吉山遺跡（24）では潤沼川を利用した水路交通の痕跡が検出されている。さらに、古代に遡ると東海道と東山道の連絡路の一部である五万堀古道（32）もある。常陸国府から始まる古道の「安侯駅家」から「河内駅家」間にあたり、両側備を持て北東—南西方向へ一直線に走行し、芯々距離は8～10mを測る。

なお、周囲には境界の明示および塗や塚が多く点在している。塚は中世より残るもので、信仰上のものとされる。遺跡の分布は主に城郭あるいは古道周辺でよく残っており、中世では万部塚（26）や千部塚（27）、近世では大日山古墳群（4）、四十八塚（6）、坂の上塚群（18）、久保原塚（31）等があげられる。北山遺跡（13）の塚は境界塚とされており、仲丸遺跡（34）では石塔の空風輪が出土し、向原遺跡（35）で確認された墳丘墓には底部を打ち欠いた源法寺焼<sup>1)</sup>の甕が中央に埋葬されていた。また、室町時代の生産遺跡である東原製鉄跡（36）では中世陶磁器片や上師質土器が出土している。

註1) 小田氏は八日知家を祖とする宍戸氏の本宗である。長子の家義が筑波山南麓に本拠を置き、小田氏を称した。

2) 常陸江戸氏は平安時代末期に常陸国那珂郡に本拠地を置いた那珂氏を祖とし、常陸の豪族として栄えた。

3) 里見氏は室町時代に第3代康倉公方足利尚基に召し出されて、常陸国に所領を得ていた。

4) 茨城県真壁町御法寺・東山田岡地区を中心にはかかれているもので、真壁焼（源法寺焼・山田焼）という。笠間約100年早い元祐10（1697）年にはすでに始まっていたとされる（真壁町歴史民俗資料館 1990『真壁の窯業 山田焼・源法寺焼 第1回企画展』）。

## 第3章 遺跡の概要と基本層序

### 第1節 遺跡の概要

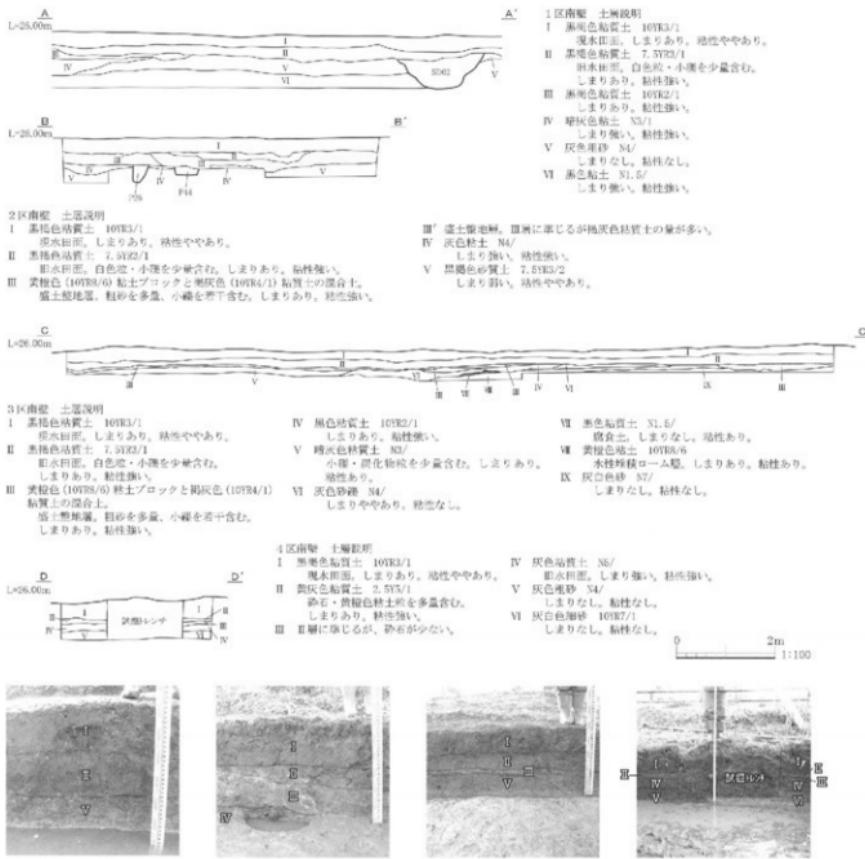
宍戸城は沖積低地上に築かれた平城で、かつては1,280,000 m<sup>2</sup>ほどの広さであった。正保午間に作成された「宍戸城下絵図」から当時の様子を知ることができる。これを基に作成した第2図によると、長辺約150mの方形郭を中心に三重の堀と上塙を巡らす構造で、南と西は潤沼川と清水寺下の小河川を外郭線としている。現在では本丸に末広福荷が鎮座し、周囲に土塁が一部残存しているのみである。

今回の調査区は「宍戸城下絵図」によると武家屋敷地に該当する。1～3区で屋敷を構成する遺構が数多く検出された。また、沖積低地という立地条件のため築城期に盛土をして地盤が整地されており、この盛土整地層を2・3区で捉えることができた。なお、4区では遺構は検出されなかつた。検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、柱穴列4列、溝跡3条、井戸跡1基、上坑2基、ピット40基である。限定された調査範囲のため、掘立柱建物跡および柱穴列の確定作業は困難であったが、2004年・2010年調査で検出された建物跡の桁行方向などから想定した。溝跡は「宍戸城下絵図」には描かれていないものである。

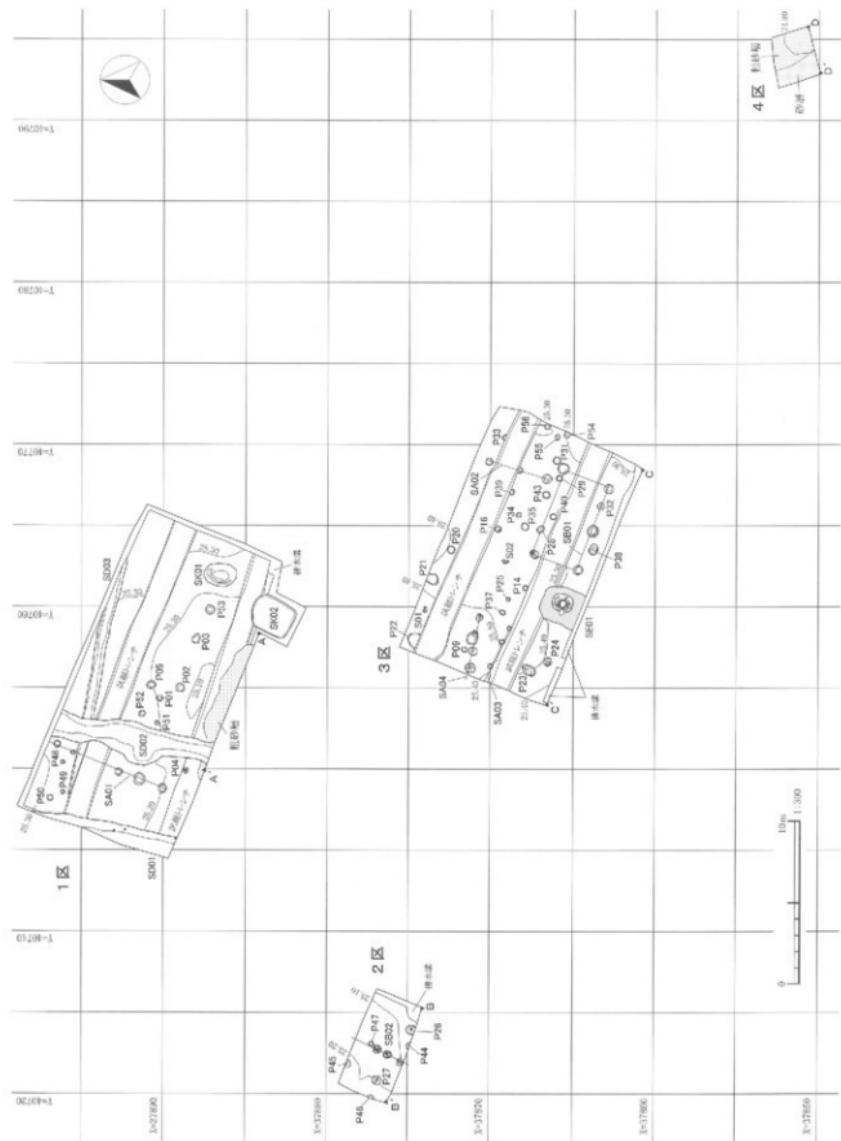
出土遺物は、上師質土器（かわらけ、内耳鍋、擂鉢）や瓦質上器（甕、火鉢、鉢、火消し壺カ）が大半を占めるが、陶磁器類も多く確認されている。貿易陶磁器（染付碗）、瀬戸・美濃系（染付碗、天目茶碗、碗、擂鉢、志野皿、織部折縁铁絵皿）、肥前系（染付碗）、常滑（甕）など国産陶磁器が主体で、中でも瀬戸・美濃系の占める割合が多い。このほか、漆器（椀）、木製品（下駄・柱材・杭）、石製品（礎）、古銭（永楽通宝）、発泡粘土塊（鍛冶関連遺物カ）、植物遺体（種）などが出土している。

第2節 基本層序

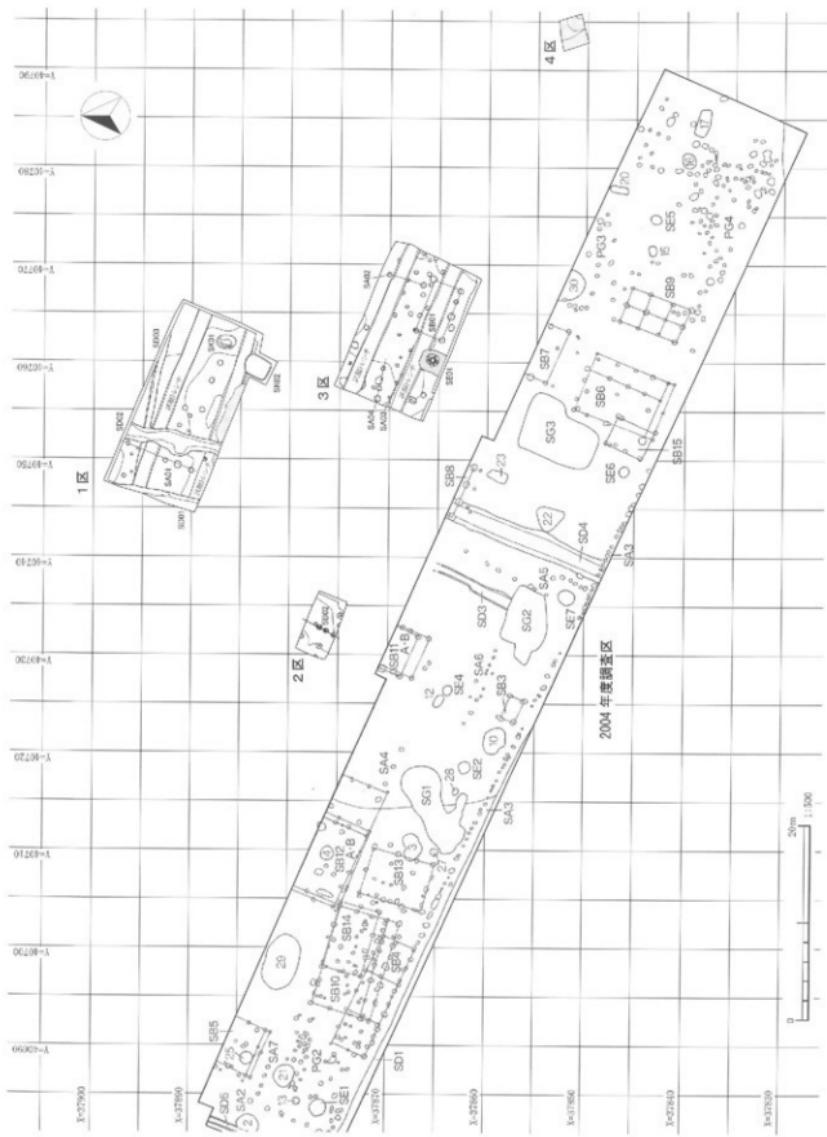
各調査区の南壁で基本層序の確認を行った。現地表面の下は旧水田面となり、2・3区では盛上整地層(2・3区とともにⅢ層)が確認された。黄橙色粘土を主体とし、多量の褐灰色粘質土・砂および若干の小礫を混入したもので、2区では最厚17cmほど残存していた。遺構確認については、1～3区はⅣ層上面、4区はV・VI層上面で行った。1～3区のⅣ層は黒色粘質土層で、粗砂・細砂の混入の有無など若干の違いが認められる。また、この層と同じ標高で砂礫・粗砂・細砂層が顔を出している箇所があり、このような自然堆積状況の異なりは、本遺跡の南方を東流する網沼川の影響と考えられる。



第3圖 基本層序



第4図 調査区全体図（1）



第5図 調査区全体図(2)

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 掘立柱建物跡

SB01 (第6～7図、表2／写真図版3・10)

位置 3区南東側に位置する。

規模と形状 調査区内では南北方向1間、東西方向2間が確認され、長方形を呈する側柱建物跡と判断したが、南北方向は調査区南外へのびる可能性も考えられる。長軸方位はN-68°-Wを指す。規模は南北方向が3.0m、東西方向が5.4mで、柱間寸法は南北方向が3.0m、東西方向が2.7mである。南北方向の柱間寸法が長いことから、試掘トレンチ内に柱穴が存在していた可能性もある。

柱穴 円形ないし梢円形で、長径57～72cm、短径46～66cm、確認面からの深さ58～89cmである。P5からは丸材の基部が据えられた状態で出土した。径20cmほどで、基礎部には加工が施されている。覆土は根ね2層からなり、上層は黄褐色粘土ブロック・炭化物・小礫等を多量に含む黒褐色粘質土、下層は炭化物粒・小礫等を少量含む黒褐色粘質土を主体とする。

遺物 P5から瀬戸・美濃系陶器片1点(碗)、土師質土器片2点(かわらけ1、鍋1)、柱材1点が出土している。土器類は小片のため図示できなかった。

所見 出土遺物や長軸方位が「宍戸城下図」に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。



第6図 SB01出土遺物

表2 SB01出土遺物観察表

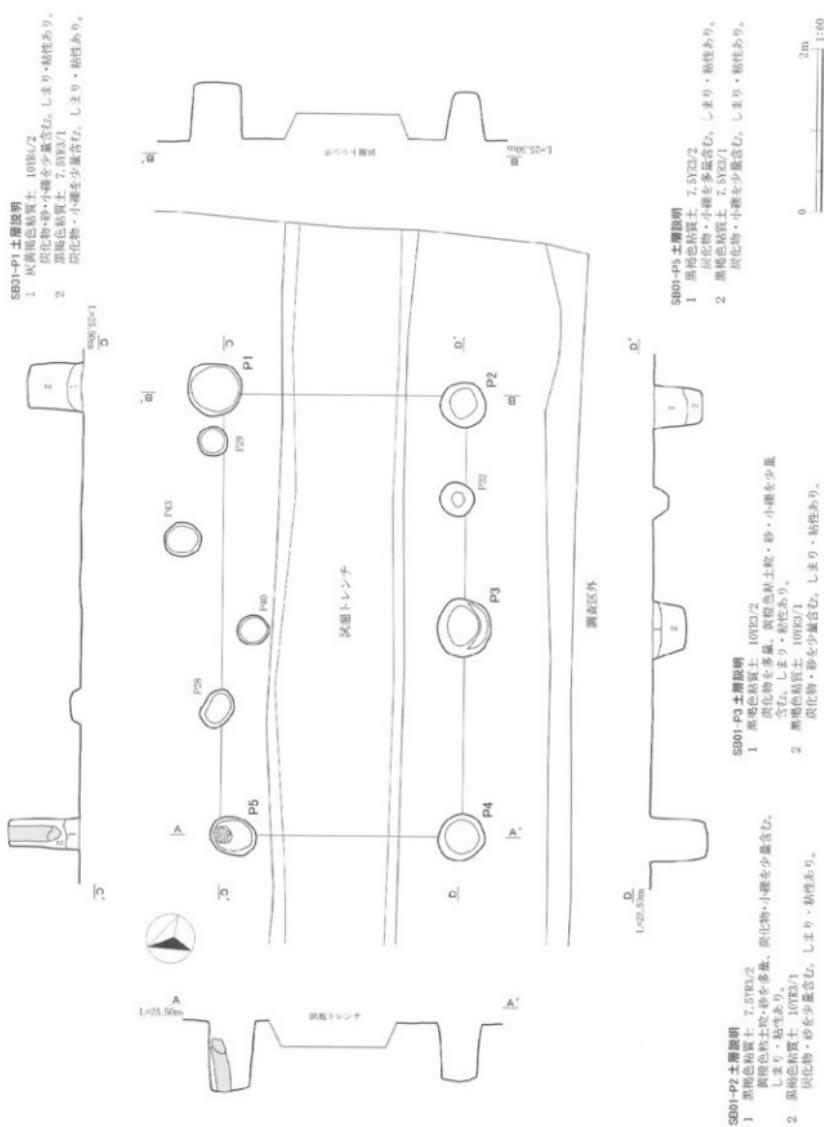
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重地	材質	特徴	出土位置	備考
1	木製品	柱材	[66.9]	20.9	17.5	[15000]	—	芯持丸材。基礎部に加工を施す。	P5内	

SB02A・B (第8～9図、表3／写真図版3・4・10)

位置 2区中央に位置する。

規模と形状 同軸上に検出された3基の柱穴から丸材と角材が出土した。全容は不明であるが、柱の大きさや丸材のまわりに割石や自然礫を充填し柱を固定する構造であること、角材の下に上面が平らな根石を据える構造であることから、建物の可能性が高く掘立柱建物跡として扱った。丸材の建物をA、角材の建物をBとした。調査区内ではAの建物で南北方向1間を確認したのみで、柱間寸法は1.7mである。南北方位はN-22°-Eを指す。

柱穴 円形ないし梢円形で、長径48～52cm、短径35～50cm、確認面からの深さ43～65cmである。Aは径12～15cm程の丸材で、基礎部に加工が施される。Bは一边14cm程の角材で基礎面は平坦である。A-P1の石材は割石が片岩で、自然礫が流紋岩・ホルンフェルスである。B-P1の根石の石材は片岩で、長さ43.5cm、幅42.8cm、最厚11.7cmである。覆土は根ね2層からなり、上層は黄褐色粘土粒・炭化物を少量含む暗灰色

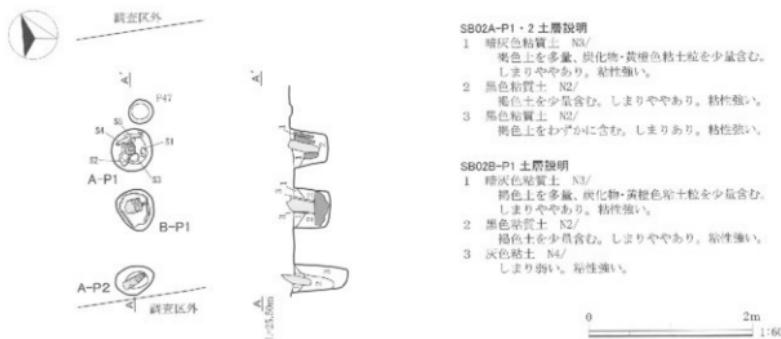


第7回 SB01

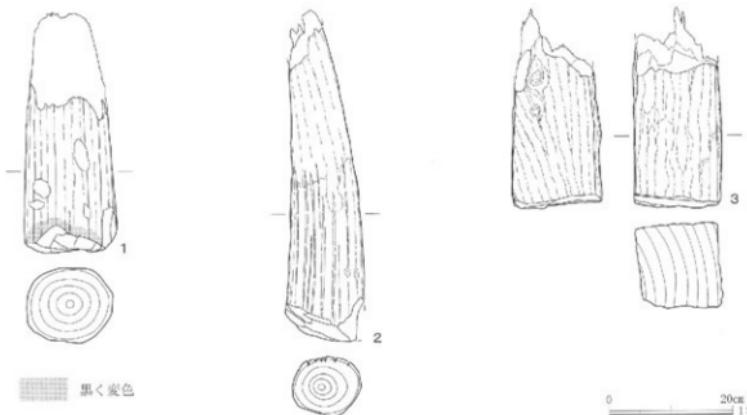
粘質土、下層は黒色粘質土を主体とする。B-P1 の角材の周囲にはしまりの弱い灰色粘土が堆積していた。

遺物 柱材は遺存していたが、陶磁器・土器類は出土しなかった。

所見 長軸方位が「宍戸城下図」に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。また、丸材から角材への転換が妥当と考えられることから、A から B への建て替えと推測される。



第8図 SB02A + B



第9図 SB02A + B 出土遺物

表3 SB02A + B 出土遺物観察表

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	木製品	柱材	[29.6]	15.4	12.3	[4500]	—	芯持丸材。茎端部に加工を施す。一部黒く変色。	A-P1 内	
2	木製品	柱材	[54.5]	15.9	9.95	[3650]	—	芯持丸材。茎端部に加工を施す。	A-P1 内	
3	木製品	柱材	[32.8]	14.4	14.1	[3900]	—	芯持丸材。基底面は平坦。	B-P1 内	

## 第2節 柱穴列

SA01 (第10図／写真図版2)

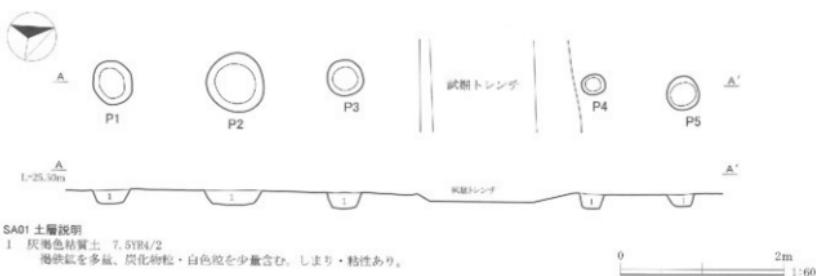
位置 1区西側に位置する。

規模と形状 北側は調査区外へのびると考えられる。調査区内では長さ7.1mを確認した。走行方位はN-22°-Eを指す。柱間寸法は1.5mで、P4-P5間は1.2mである。

柱穴 円形ないし楕円形で、長径28~72cm、短径25~68cm、確認面からの深さ16~20cmである。覆土は単層で炭化物・灰白色粘土ブロックを含む褐灰色粘質土を主体とする。

遺物 出土しなかった。

所見 走行方位が「宍戸城下図」に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。



第10図 SA01

SA02 (第11~12図、表4／写真図版4・8)

位置 3区北東側に位置する。

規模と形状 北側は調査区外へのびると考えられる。調査区内では長さ3.7mを確認した。走行方位はN-19°-Eを指す。柱間寸法はP1-P2間が1.9m、P2-P3間が1.8mである。

柱穴 円形ないし楕円形で、長径37~56cm、短径36~52cm、確認

面からの深さ41~44cmである。覆土は単層で炭化物・灰白色粘土ブロックを含む褐灰色粘質土を主体とする。

遺物 P1から瓦質土器片1点(火鉢)が出土した。

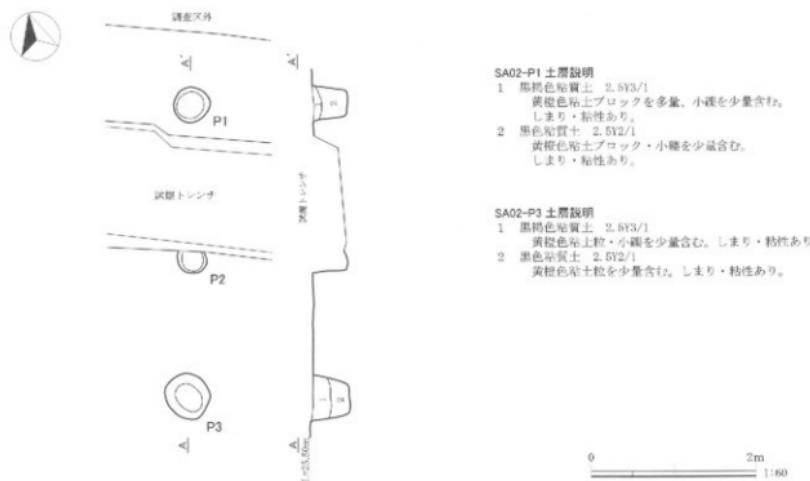
所見 出土遺物や走行方位が「宍戸城下図」に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。



第11図 SA02 出土遺物

表4 SA02 出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	断面	底径	粘土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	瓦質土器	火鉢	—	—	—	粘土・表面骨付、石英・白色粒	オリーブ色	良好	外：ヨコナギ、2条の横紋沈理間にストレプス。 内：ヨコナギ。	円内	口縁部破片



第12図 SA02

### SA03 (第13図／写真図版4)

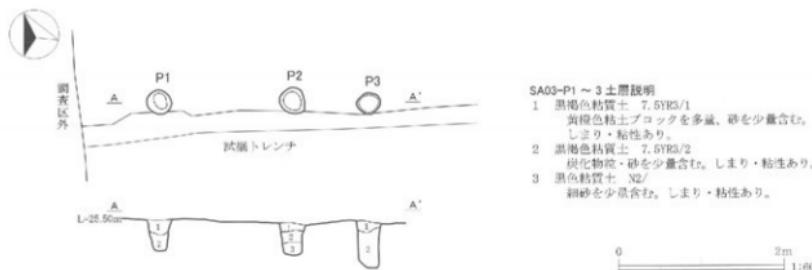
位置 3区西侧に位置する。

規模と形状 西側は調査区外へのびると考えられる。調査区内では長さ 2.6 m を確認した。走行方位は N-66°-W を指す。柱間寸法は P1-P2 間が 1.7 m、P2-P3 間が 0.9 m である。

柱穴 円形で、長径 30 ~ 33 cm、短径 27 ~ 33 cm、確認面からの深さ 37 ~ 56 cm である。覆土は上層に黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色土、下層は炭化物粒を含む黒褐色土を主体とする。

遺物 出土しなかった。

所見 走行方位が「宍戸城下図」に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。



第13図 SA03

## SA04 (第 14 ~ 15 図、表 5 / 写真図版 4・8・10)

位置 3 区西側に位置する。

規模と形状 西側は調査区外へのびると考えられる。調査区内では長さ 3.4 m を確認した。走行方位は N - 79° - W を指す。往間寸法は 1.2 m で、P2-P3 間は 1.0 m ある。

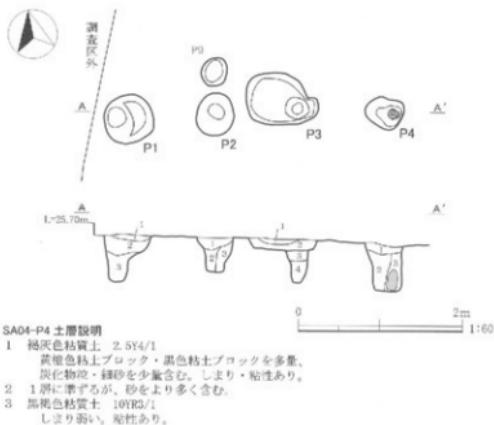
柱穴 円形ないし梢円形で、長径 45 ~ 92 cm、短径 38 ~ 64 cm、確認面からの深さ 42 ~ 57 cm である。P1 には丸材が残存していた。径 15 cm 程度で、基盤部は加工が施されている。また、P3 は木質は残存していないものの、柱痕が確認できる。覆土は概ね、上層は黄褐色粘土ブロックを多量に含む褐灰色粘質土、下層は黄褐色粘土ブロックを少量含む黒褐色粘質土を主体とする。

遺物 P1 から土師質土器片 1 点 (かわらけ)、P4 から柱材 1 点が出土した。

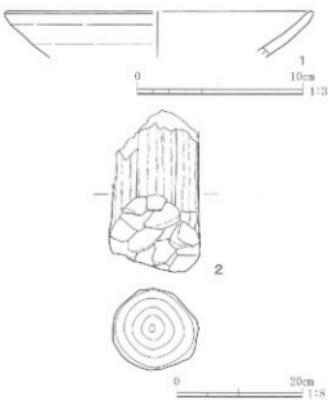
所見 走行方位が「宍戸城下図」に記された区画と一致しておらず、武家屋敷群が整備される以前のものと考えられる。

表 5 SA04 出土遺物観察表

番号	種別	断面	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	馬士位置	備考
1	土師質土器	かわらけ	(18.8)	[2.8]	—	全表面・石英・白色粒	にふい黄褐色	良好	クロコ成形。	P1 内	口縁部片
2	木質品	柱材	[26.6]	15.0	12.5	[2628]	—	芯持丸材、基盤部に加工が施される。		P4 内	



第 15 図 SA04



第 14 図 SA04 出土遺物

## SA04-P1 土層説明

- 褐灰色粘土 5Y4/1  
黄褐色粘土ブロックを非常に多く、炭化物粒・小礫を少量含む。しまり・粘性あり。
- 暗灰黄色粘土 2.5Y6/2  
炭化物粒・小礫を少量含む。しまり・粘性あり。
- 黒褐色粘土 2.5Y3/1  
黄褐色粘土ブロック・細砂を多量、小礫を少量含む。しまり・粘性あり。

## SA04-P2 土層説明

- 褐灰色粘土 5Y4/1  
黄褐色粘土ブロックを多量、炭化物粒・小礫を少量含む。しまり・粘性あり。
- 褐灰色粘土 10YR4/1  
黄褐色粘土ブロックを少量含む。しまり・粘性あり。
- 褐色粘土 10Y5/1  
黄褐色粘土粒・小礫を少量含む。しまり・粘性あり。

## SA04-P3 土層説明

- 炭化物粒粘土 10YR4/2  
黄褐色粘土粒・炭化物粒を多量、小礫を少量含む。しまり・粘性あり。
- 褐灰色粘土 10YR4/1  
黄褐色粘土ブロックを多量、炭化物粒・小礫を少量含む。しまり・粘性あり。
- 黒褐色粘土 10YR3/1  
しまり弱い。粘性あり。
- 黒褐色粘土 10YR3/1  
しまり弱い。粘性あり。

### 第3節 溝跡

SD01 (第16～17図、表6／写真図版5・8・10)

位置 1区西端に位置する。

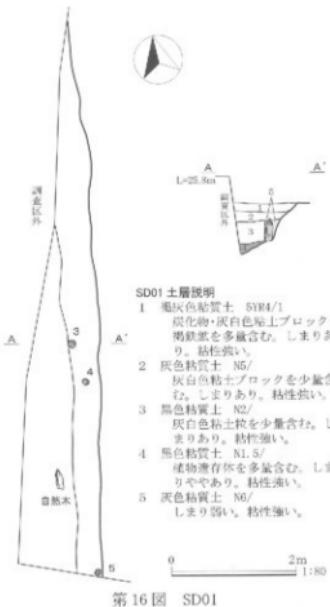
重複 SD03と重複し、本溝跡が新しい。

規模と形状 北・南・西側は調査区外となり全容は不明である。調査範囲内では、長さ9.52m、上幅1.36m、下幅0.95m、確認面からの深さ0.83mである。N-10°-Eへ直線的に走行すると推測される。壁は急な傾斜で立ち上がる。壁際に杭が3本残っていた。径12～14cmの丸材で、基壇部に加工が施されている。3・5には樹皮が一部残る。

覆土 5層からなる。最下層は黒色粘質土が堆積し、植物遺存体がまばらに確認される。中層は灰白色粘土ブロックを含む黒色粘質土、上層は灰白色ブロック・炭化物粒を含む灰色粘質土が堆積する。3のまわりはしまりのある灰色粘質土が堆積していた。

遺物出土状況 中層から土師質土器片1点(擂鉢)、自然木1点、下層から古銭1点(永楽通宝)、壁際から杭3点が出土した。

所見 走行方位が「戸戸城下絵図」に記された区画と一致しておらず、武家屋敷群が整備される以前のものと考えられる。



第16図 SD01

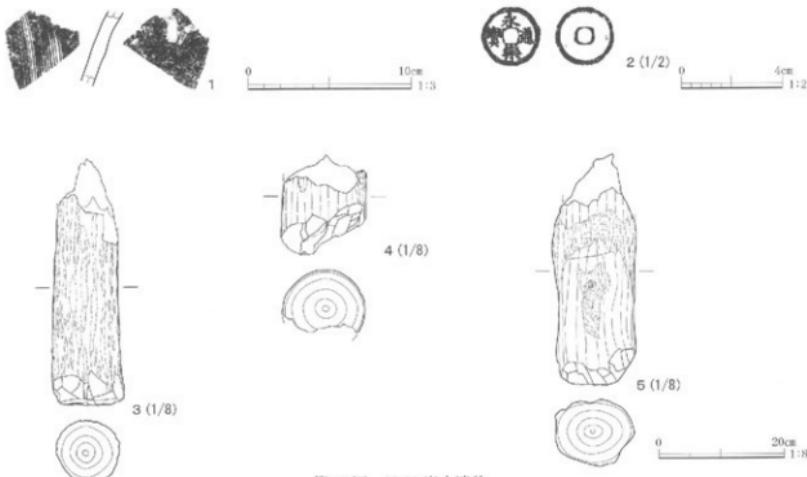


表6 SD01出土遺物観察表

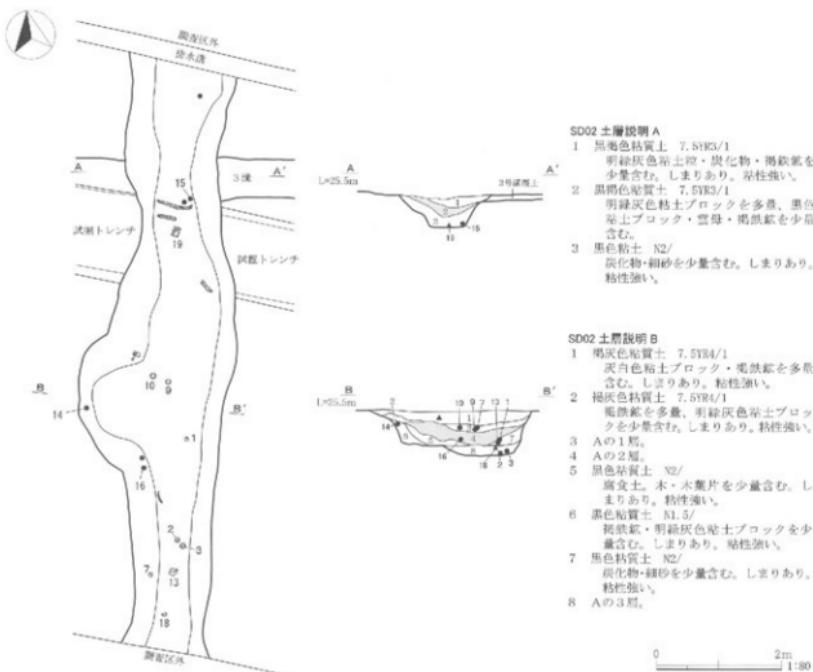
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	土師質 土器	壺鉢	—	—	—	石英・白色粒	黒褐色	良好	外:ナガ 内:7条1段の櫛目	覆土中層	体部破片
2	古鉢	—	2.5	0.6	0.1	2.67	陶	—	水浸過立。初鉢年1408年。	覆土下層	先端
番号	種別	器種	径	高さ	厚さ	重量	材質	—	時数	出土位置	備考
2	古鉢	—	2.5	0.6	0.1	2.67	陶	—	水浸過立。初鉢年1408年。	覆土下層	先端
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	—	時数	出土位置	備考
3	木製品 成	[41.7]	12.0	10.8	[2163]	—	—	芯持丸材。基端部に加工を施す。梢端が彫存。	東竪開	東竪開	
4	木製品 成	[16.9]	14.2	[13.9]	[996]	—	—	芯持丸材。基端部に加工を施す。	東竪開	東竪開	
5	木製品 核	[30.1]	14.1	11.3	[3786]	—	—	芯持丸材。基端部に加工を施す。一部削痕が遺存。	東竪開	東竪開	

## SD02 (第18~20図、表7/写真図版5・8・10)

位置 1区中央より西側に位置する。

重複 3号溝跡と重複し、本溝跡が新しい。

規模と形状 北・南側は調査区外にかかる。調査範囲内では、長さ9.56m、上幅1.16~2.40m、下幅0.48~1.88m、確認面からの深さ0.48~0.76mである。N=11°-Eへ直線的に走行し、溝幅が広がる箇所



第18図 SD02

もある。底面は凹凸があり、壁は急な傾斜で立ち上がり、上位で緩やかに開く。

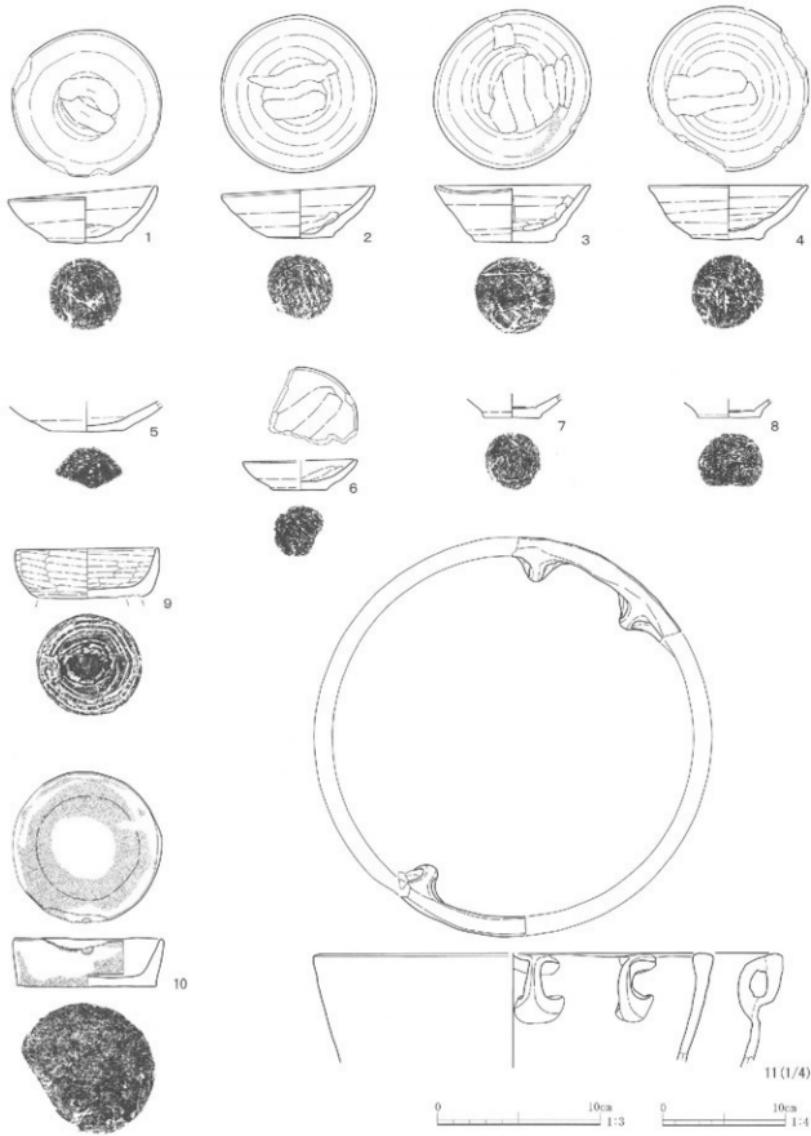
**覆土** 8層からなる。中層（A - 2層、B - 4層）は大振りの明緑灰色粘土ブロックを多量に含む層で、人為堆積と考えられる。この下層は炭化物・細砂を含む黒色粘土層、上層は明緑灰色粘土ブロックを少量含む褐色粘土を主体とする。B - 5層は腐食上で植物遺存体がみられる。

**遺物出土状況** 土師質土器 44点（かわらけ 6、同破片 33、内耳鍋 3、鍋カ 2）、瓦質土器片 8点（堺）、青磁片 1点、漆椀 1点、木片が出土している。下層ではかわらけ（第19図1～6）、土師質土器内耳鍋（第19図11・第20図12）、瓦質土器壺（第20図13・15）、漆椀（第20図18）、木材（第20図19）が、人為堆積層中からは瓦質土器壺（第20図16）が、これより上ではかわらけ（第19図7・9・10）が出土した。

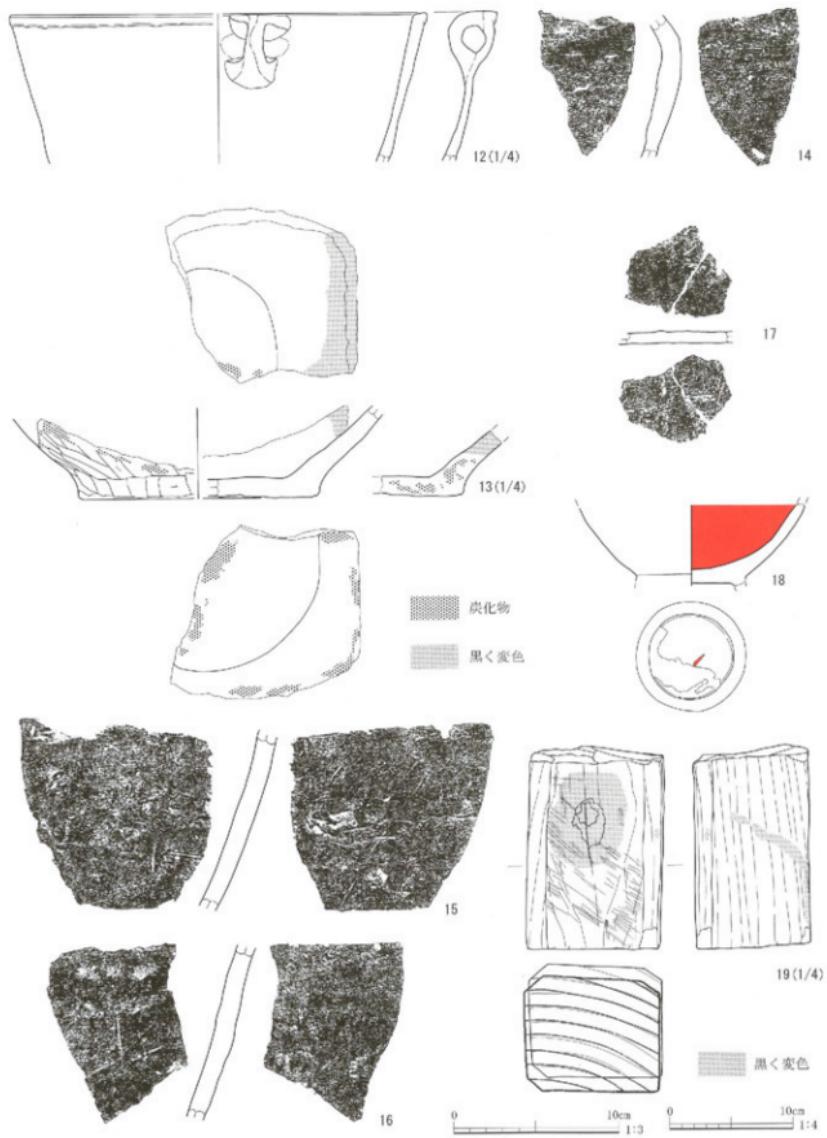
**所見** 下層出土の内耳鍋がやや古手の様相を示すこと、走行方位が「宍戸城下絵図」に記された区画と一致していないことから、武家屋敷群が整備される以前のものと考えられる。

表7 SD02出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴		出土位置	備考
									手法	文様		
1	土師質土器	かわらけ	9.0	3.2	4.5	金雲母・石英・白色粒	灰褐色	良好	クロス成形、底部回転糸切り一板状底 底。見込み骨ナデ。	櫻土下層	ほぼ丸形	
2	土師質土器	かわらけ	9.3	3.0	4.0	金雲母・赤色粒	にぶい緑	良好	クロス成形、底部回転糸切り一繊物状底 底。見込み骨ナデ。	櫻土下層	丸形	
3	土師質土器	かわらけ	9.4	3.5	4.8	金雲母・赤色粒	にぶい緑	良好	クロス成形、底部回転糸切り一繊物状底 底。見込み骨ナデ。	櫻土下層	ほぼ丸形	
4	土師質土器	かわらけ	9.6	3.4	4.4	金雲母・赤色粒	緑	良好	クロス成形、底部回転糸切り一繊物状底 底。見込み骨ナデ。	櫻土下層	丸形	
5	土師質土器	かわらけ	-	[1.8]	(4.6)	粗砂粒	西黄	普通	クロス成形、全面磨耗。	櫻土下層	1/3 烧部 欠損	
6	土師質土器	かわらけ	(6.0)	1.9	3.3	砂粒	にぶい黄	普通	クロス成形、底部回転糸切り一板状底 底。見込み骨ナデ。	櫻土下層	1/3 烧部 欠損	
7	土師質土器	かわらけ	-	[1.5]	3.4	石英・閃灰石	にぶい緑	普通	クロス成形、底部回転糸切り一板状底 底。見込み骨ナデ。	櫻土上層	休・焼部	
8	土師質土器	かわらけ	-	[1.1]	3.8	石英・角閃石	淡黄緑	普通	クロス成形、底部回転糸切り。見込み 骨捺に沈没。	櫻土上層	休・焼部	
9	土師質土器	台付小皿	8.6	[3.0]	-	雲母・赤色粒 紫色	灰青	良好	外側横方向のミガキ。見込みミガキ。 底面に高台を設けたための縦溝。(3 半1半2) に残る。	櫻土上層 櫻土下層	口輪部 高台 底部欠損	
10	土師質土器	小皿	9.0	3.0	8.4	金雲母 黒色	にぶい黄緑	良好	外側横ヨコマサ。底部織な骨ナデ。外側 の欠損部は遮蔽する。出擲が付し、周囲には化粧。	櫻土上層	口輪部 焼部骨質	
11	土師質土器	内耳鍋	(32.0)	[9.6]	-	白色粒	灰	良好	外面に高い支足。内面横方向のナ デ。内耳の底径は2:1とみられる。	櫻土下層	3/8 烧部 欠損	
12	土師質土器	内耳鍋	(32.0)	[12.4]	-	石英粒多量	灰	良好	外面に高い支足。内面横方向のナ デ。内耳1.5倍残存。	櫻土下層	口輪・休 3/8 烧部 欠損	
13	瓦質土器	甕	-	[7.6]	(29.3)	白色粒多量	灰	良好	外側横方向のハラケズリ。底部ナデ。 内面回転ナデ。外側横の縫・破断面に 有目痕のある炭化物付着。内底面か ら周縁にかけて平滑。	櫻土下層	休・焼部 1/4 烧部 欠損	
14	瓦質土器	甕	-	-	-	白色粒多量	灰	良好	内面回転ナデ。外側横回転ヘラケ ズリ。	櫻土中層	肩部破片	
15	瓦質土器	甕	-	-	-	白色粒多量	灰	良好	内面ナデ。内面横方向のハラケズリ。 16と同一個体。	櫻土下層	肩部破片	
16	瓦質土器	甕	-	-	-	白色粒多量	灰	良好	内面ナデ。内面横・斜方向のハラケズ リ。16と同一個体。	櫻土上層	肩部破片	
17	土師質土器	鍋	-	-	-	金雲母多量 ・石英	にぶい赤褐色	良好	内面全面ナデ。源流付近。	櫻土下層	底部破片	
18	漆器	杓	-	[5.0]	-	-	外: 黒 内: 地市物	良好	外茎上彫り玉形、表面に朱赤の文様。 内側上彫り玉形。本体を骨頭。	櫻土下層	休・高台部 1/3 烧部 欠損	
19	木製品	詰材	16.9	11.3	9.7	1495	-	芯染負材。背面は加工により平滑化。一部に炭化箇所があ る。	櫻土下層	櫻土欠損		



第19図 SD02出土遺物(1)



第20図 SD02出土遺物（2）

SD03 (第 21 ~ 22 図、表 8 ~ 9 / 図版 6・8・10)

位置 1 区の北側に位置する。

重複 1・2 号溝跡と重複し、本溝跡が古い。

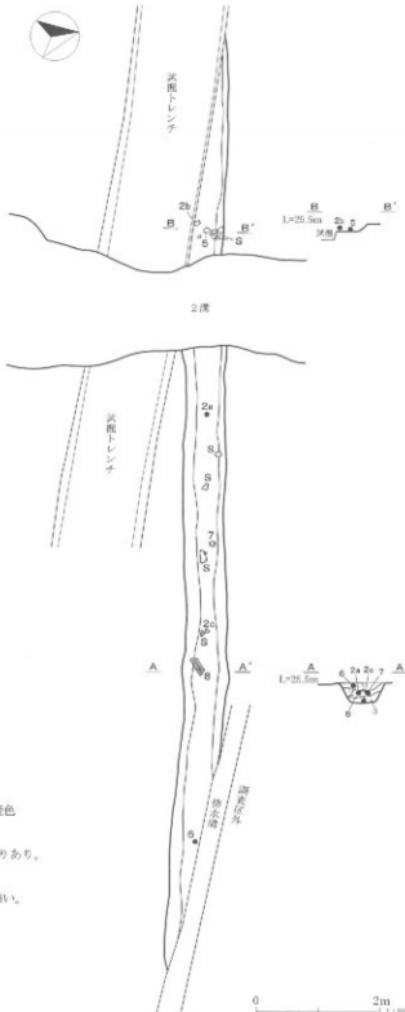
規模と形状 東・西側は調査区外にかかる。

調査範囲内では、長さ 15.4 m、上幅 0.62 ~ 0.78 m、下幅 0.22 ~ 0.44 m、確認面からの深さ 0.20 ~ 0.32 m である。N = 79° - W へ直線的に走行する。底面はほぼ平坦で、壁は急な傾斜で立ち上がる。

覆土 3 層からなる。下層に黄橙色粒・炭化物を含む黒褐色粘質土、上層に炭化物・灰白色粘土ブロック・黄橙色ブロックを含む褐灰色粘質土が堆積する。

遺物出土状況 覆土上～下層から、瀬戸・美濃系破片 1 点 (志野碗)、常滑片 5 点 (甕)、土師質土器片 7 点 (かわらけ 3、擂鉢 2、甕 1、鉢カ 1)、瓦質土器片 13 点 (擂鉢 1、甕・鍋 12)、木製品 2 点 (板材 1、棒状製品 1)、礫 6 点が出土している。常滑甕 (第 22 図 2) は破片が溝の広い範囲に点在して出土している。礫は片岩、粘板岩、流紋岩、石英斑岩、ホルンフェルスである。

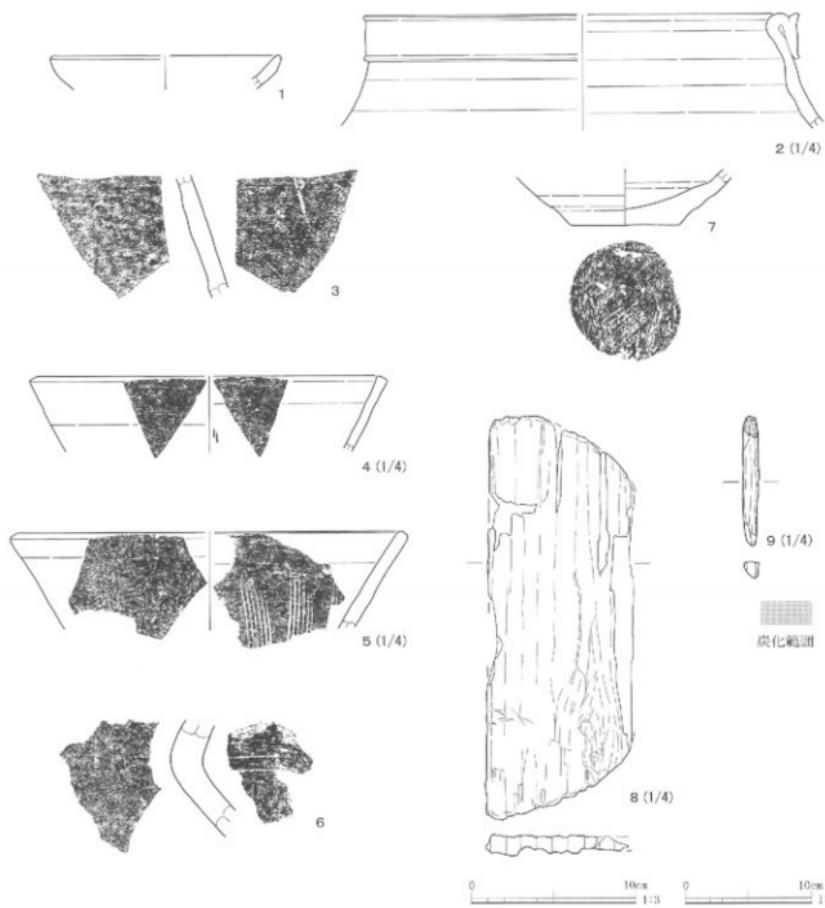
所見 走行方位が「宍戸城下絵図」に記された区画と一致しておらず、武家屋敷群が整備される以前のものと考えられる。



SD03 土層説明

- 1 搪沃色粘質土 SYH4/1  
炭化物・陶質鉢を多量、灰白色粘土ブロック・黄橙色ブロックを少量含む。しまりあり。粘性強い。
- 2 黒褐色粘質土 GYK3/1  
瓦質鉢を多量、炭化物・黄橙色鉢を少量含む。しまりあり。粘性強い。
- 3 黑色粘質土 7.SYR2/1  
炭化物・黄橙色鉢を微量含む。しまりあり。粘性強い。

第 21 図 SD03



第22図 SD03出土遺物

表8 SD03出土遺物観察表(1)

番号	種別	断面	口径	底高	底径	粘土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	陶器	直	(13.6)	[2.1]	—	黒色粘	數:灰白 輪:灰白	良好	ロクロ成形。内外面長石浦。志野。	覆土一括	口縁部破片 茎部
2	陶器	裏	(34.6)	[9.3]	—	石英・白色粒	無赤接	良好	内外面ヨコナギ。口唇部に自然積釉付着。茎部。3と同一個体。	覆土下層	口縁部破片 3点
3	陶器	側	—	—	—	石英・白色粒	灰赤	良好	内外面横方向のナギ。内面無釉面。外面に自然積付着。茎部。2と同一個体。製造の一邊に多量の炭化物付着。	覆土一括	腹部破片
4	玉質 土器	横断	(27.4)	[6.1]	—	白色粘	黒	普通	内外面凹凸ナギ。内面に2本の細目。	覆土一括	口縁部破片

表9 SD03出土遺物観察表(2)

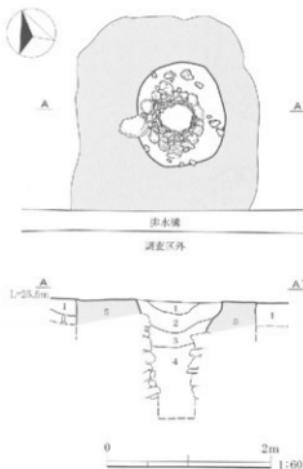
番号	種別	面積	口径	深度	底形	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
5	土師質 土器	標本	(40.0)	[7.9]	—	青褐色・石英・ 白色粒	にぶい緑	普通	口縁部凹弧ナメ。外底一部横方向への ラケズリ。内面6本1単位の瘤目。	覆土下層	口縫部破片
6	土師質 土器	甕	—	—	—	石英・白色粒・ 褐色粒	棕	普通	内外面口縁部コナゲ、瘤詰ナメ。外 面底部に瘤目沈線2条。	覆土上層	口縫部破片
7	土師質 土器	鉢	—	[3.5]	6.7	金雲母・白色粒	棕	良好	コタマ成形。底面部回転手切り後ナメー ト状底柱。	覆土中層	底部
番号	種別	面積	長さ	幅	厚さ	重量	材料	特徴	出土位置	備考	
8	木製品	板材	32.5	[11.5]	1.7	[400]	—	班目・板目。	覆土中層	一部欠損	
9	木製品	棒状製品	10.6	1.2	1.4	9	—	上部は削化。上端・下端部に加工痕。	覆土一括	完形なし	

#### 第4節 井戸跡

SE01 (第23～24図、表10／写真図版6・9)

位置 3区南西側に位置する。

規模と形状 上幅長径1.27m、短径1.04mの楕円形を呈する。長軸方位はN-9°-Eである。石組で構築され、石組の内径は0.60mである。上部の石は取り外されていた。主要な石材には安山岩・流紋岩・片岩などがあり、自然石と割石を併用している。湧水のため底面を検出することはできなかったが、確認面からの深さは1.46m以上である。石組部分の壁はほぼ垂直に立ち上がる。なお、井戸側の掘り方は長径2.40m以上、短径2.23mで、そこに浅黄褐色粘土ブロック・黒褐色粘土質土・粗砂を混合した土(5層)を充填して基礎基盤を強化した後に構築されている。これは、井戸が構築された場所が他より高い標高で粗砂層が現れており地盤が弱いためと考えられる。



## SE01 土層説明

- 1 暗灰色粘土 7.5YR4/1  
黄褐色粒・炭化物・細砂・小礫・褐鐵鉄を少量含む。  
しまりあり。粘性あり。
- 2 暗灰色粘土 7.5YR5/1  
灰化物・細砂・褐鐵鉄を少含む。しまりあり。粘性あり。
- 3 黒褐色粘土質土 7.5YR3/1  
褐鐵鉄を多量、粗砂を少含む。しまりあり。粘性強い。
- 4 黒褐色粘土質土 N2/  
細砂を少含む。しまり弱い。粘性強い。
- 5 浅黄褐色粘土ブロック・灰白色粘土ブロック・黒褐色粘土質土・粗砂の複合土。  
褐鐵鉄を少含む。しまり強い。粘性強い。
- I 黒褐色粘土 N2/  
しまり強い。粘性強い。
- II 灰白色粗砂 N7/  
しまりなし。粘性なし。

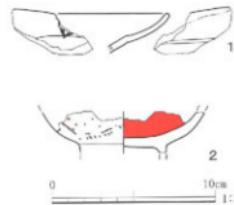
第23図 SE01

**覆土** 4層からなる。上層は炭化物・細砂を含む褐色粘質土、下層は細砂を含む黒色粘質土を主体とする。4層からは木の根が出土しており、人為的に入れられたものと考えられる。

**遺物出土状況** 遺物の出土量は少なく、4層から1の陶器片(皿)、

2の漆塗、3の種子、木片数点が出土した。

**所見** 出土遺物から17世紀前半と考えられる。



第24図 SE01出土遺物

表10 SE01出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	陶器	折縁皿	—	—	—	白色粘	胎:に高い 模 様:灰白	良好	ロクロ成形。体部外面開拓ヘラクズリ。 外表面腰域部から内面に灰粒。胎の部分は露入。内面に繪様の意文。	盤上下層 被覆	口縁~体部 被覆
2	漆器	桶	—	[2.4]	—	—	外:墨 内:赤施	—	外面上部り墨漆。体部に赤漆あり。内 面上部り赤漆。	腹土下層 1/2	体~肩台部 1/2
番号	種別	器種	大きさ	幅	厚さ	重量	材質	—	特徴	出土位置	備考
3	種	—	—	—	—	—	—	—	写真的み掲載。	腹土下層	—

## 第5節 土坑

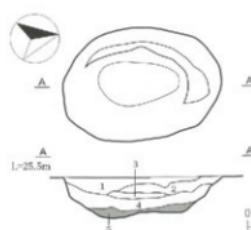
SK01 (第25~26図、表11/写真図版6・9)

**位置** 1区東側に位置する。

**規模と形状** 長軸1.96m、短軸1.40m、確認面からの深さ0.50mである。平面形は梢円形を呈する。底面には凹凸があり、壁面は外傾して立ち上がる。長軸方位はN-2°-Eである。

**覆土** 5層からなる。最下層(5層)は黒色腐食土で、植物遺存体を多量に含む。中層には青灰色粘土ブロック、黒色粘土ブロック・細砂を含む褐色粘土、上層には黄褐色粘土ブロック・細砂・炭化物粒・小礫を含む黒褐色粘質土が堆積する。自然堆積と思われる。

**遺物出土状況** 土師質土器片8点(擂鉢1、鍋1、かわらけ6)、瓦質土器片1点(鍋)、磁器片1点(染付皿)、陶器片2点(皿1、擂鉢1)が出土している。なお、かわらけは小片のため図示できなかった。

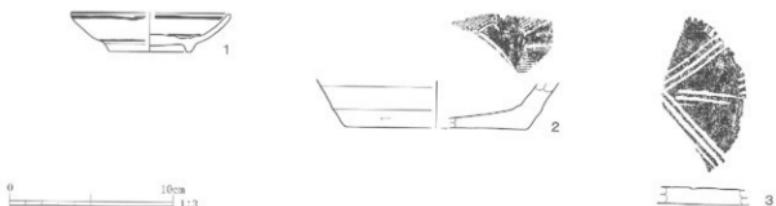


SK01 土層説明

- 1 黒褐色粘質土 7.5YR3/1  
細砂を多量、黄褐色粘土ブロック・炭化物・小礫を少量含む。しまりあり。粘性あり。
- 2 にじみ黄色細砂 2.5Y6/3  
褐色粘質土を少量含む。しまりなし。粘性強い。
- 3 褐灰色粘土 7.5YR5/1  
白色粘土を少量、細砂を微量含む。しまりややあり。粘性強い。
- 4 褐灰色粘土 7.5YR4/1  
青灰色粘土ブロックを多量、黒色粘土ブロックを少量、細砂を微量含む。しまりややあり。粘性強い。
- 5 黒色粘質土 7.5YR1.7/1  
腐食土。植物遺存体を多量含む。しまり弱い。粘性あり。

第25図 SK01

所見 出土遺物から 17 世紀前半と考えられる。



第 26 図 SK01 出土遺物

表 11 SK01 出土遺物観察表

番号	種別	直径	口径	器高	近径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	器底	粗	(9.6)	2.4	(6.0)	焼結	暗: 深黄 盤: 沢白	良好	クロコ皮割。胎付。内外面に墨書き。 唇付から茎部墨書き。見込み部の目錬割。 底: 肥厚 (底座見、平戸型)。	覆土下層	1/2 残存
2	器底	粗縫	—	[2.9]	(11.4)	白色化	暗: 沢白 盤: 黒焦	良好	内外面鉄錆。表面(本部)下位円弧へテカズリ。 内側底部と見込みに胎目。底部 回転切切り一周強ナット。撇戸・希望系。	覆土下層	底部板片
3	土師質 土器	粗縫	—	—	—	黒粉・白色化	に赤い斑	普通	見込み口 2 条 1 手引の脚目。金合無く 朱色し模様にスス付る。二次被熱か。	覆土下層	底部板片

SK02 (第 27 ~ 28 図、表 12 / 写真図版 7・9)

位置 1 区南東側に位置する。

規模と形状 長軸 2.68 m、短軸 2.12 m、確認面からの深さ 0.13 m である。平面形は隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦であり、壁面は外傾して立ち上がる。長軸方位は N - 28° - E である。

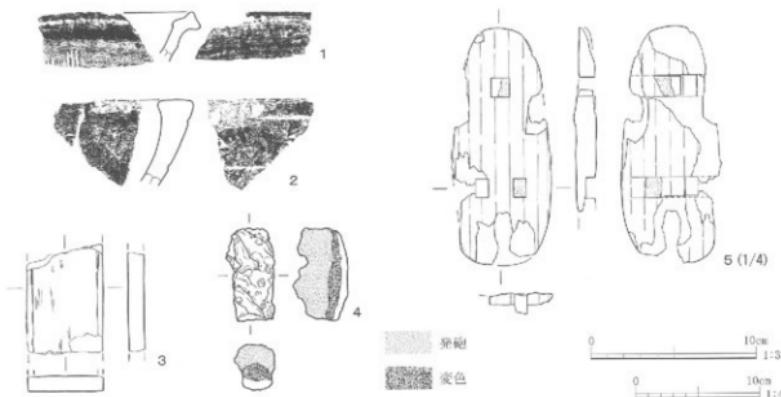
覆土 5 層からなる。4 層は黒色腐食土で、植物遺存体を多量に含む。中層には黒褐色土・炭化物・小礫を含む黄褐色粘土、上層には砂・ローム粒・小礫等を含む灰褐色粘土が堆積する。自然堆積と思われる。



第 27 図 SK02

遺物出土状況 土師質土器片4点（かわらけ3、鍋1）、瓦質土器片1点、陶器片2点（甕1、擂鉢1）、硯1点、発泡粘土塊（鍛冶関連遺物カ）1点、下駁1点、丸材1点が出土している。丸材や石を除く遺物は竪食土層（4層）の上からの出土である。

所見 出土遺物から17世紀前半と考えられる。



第28図 SK02出土遺物

表12 SK02出土遺物観察表

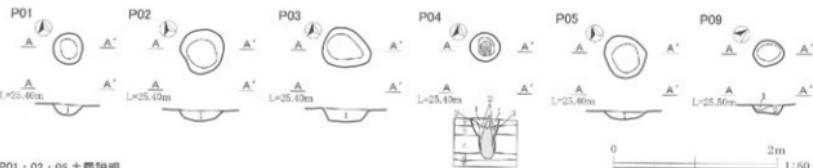
番号	種別	器種	口径	盤高	底径	粘土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	陶器	擂鉢	—	—	—	白色粘土質	黄：淡黄 褐：暗茶灰	良好	内外面直塗。内正面目、1単位8本以上。	縹土下層	口縫部破片 窓戸・美濃
2	瓦質土器	火鉢	—	—	—	青白：白色粘	黒	普通	外面2枚の横放沈織による区画内に菊印花文。内面ヨコナゲ。	縹土下層	口縫部破片
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
3	石製品	硯	[7.0]	4.8	1.0	[50.78]	粒状岩	長方硯。表面は丁寧な研磨。	縹土中層	青縫部・縫欠 植	
4	発泡 粘土塊	—	5.9	3.1	3.4	40	白色粘を若干含む粘土	内部は弱い熱を受けて薄く軟化するが、ガラス化していない。表面部の下は茶色。表面に網目状の裂き2ヵ所。	縹土下層	発泡粘土塊物 の可燃性あり	
5	木製品	下駁	[23.0]	[8.5]	1.9	[130.2]	—	墨面下駁。表面が一部残る。上面に压痕による光沢あり。	縹土下層	1/3次側	
6	木柱	—	—	—	—	—	写真のみ毛刷。	—	縹土下層	—	
7	木柱	—	—	—	—	—	写真のみ毛刷。	—	縹土下層	—	

## 第6節 ピット（第29～32図、第13～14表／写真図版9・10）

本調査ではピットが計56基検出された。2・3区に密集して検出され、この内、掘立柱建物跡および柱穴列としたP06～08・10～13・15・17～19・30・36・40～42の16基は欠番とした。建物などの可能性が高い、木柱が残るピットが5基検出されたものの（P04・16・23・26・27）、調査区の制約のため確実な配列を捉えることはできなかった。木柱は全て丸材で、基縫部に加工が施されている。写真のみ掲載した。形状

表13 ピット計測一覧表

番号	位置	平面 形態	横幅 (cm)			備考
			長径	短径	深さ	
P01	1区中央	円形	37	36	13	
P02	1区中央	円形	53	51	12	
P03	1区	橢円形	60	50	15	
P04	1区	円形	36	35	48	丸財出土。長さ[49.0], 幅15.3, 厚さ11.5。下層部加工。褐色地斑, 灰紫色土質が出土。
P05	1区	橢円形	55	47	9	
P06	3区	円形	60	59	38	欠番。SA04-P1に変更。
P07	3区	橢円形	53	48	41	欠番。SA04-P2に変更。
P08	3区	橢円形	92	64	32	欠番。SA04-P3に変更。
P09	3区	円形	37	31	9	
P10	3区	橢円形	45	38	55	欠番。SA04-P4に変更。灰土出土。
P11	3区	円形	30	29	38	欠番。SA03-P1に変更。
P12	3区	橢円形	29	26	57	欠番。SA03-P3に変更。
P13	3区	橢円形	33	31	46	欠番。SA03-P2に変更。
P14	3区	円形	32	28	11	
P15	3区	橢円形	56	48	87	欠番。SB01-P6に変更。
P16	3区	円形	39	38	33	大材出土。部分的。長さ[22.5]。
P17	3区	円形	56	52	45	欠番。SA02-P3に変更。
P18	3区	—	—	35	43	欠番。SA02-P2に変更。
P19	3区	円形	45	44	46	欠番。SA02-P1に変更。
P20	3区	円形	40	45	41	かさ6.4片×4点、陶器片2点出土。
P21	3区	橢円形	—	65	21	土師質土器断片1点、瓦質陶器片1点、筒瓦器1点出土。
P22	3区	橢円形	—	97	16	
P23	3区	橢円形	89	59	37	丸財出土。長さ[25.0], 幅12.8, 厚さ11.4。下層部加工。かさ6.4片×2点出土。
P24	3区	円形	94	47	36	
P25	3区	円形	24	24	18	
P26	2区	橢円形	—	87	38	丸財出土。長さ[40.0], 幅12.5, 厚さ12.6。下層部加工。黒色化。



## P01・02・05 土層説明

1 灰色粘質土 NS/  
褐色鉄を多量含む。しまりややあり。粘性強い。

## P03 土層説明

1 灰褐色粘質土 NS/  
灰白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・  
褐鐵鉄を多量、白色鉄・炭化物鉄を少量含む。  
しまりややあり。粘性強い。

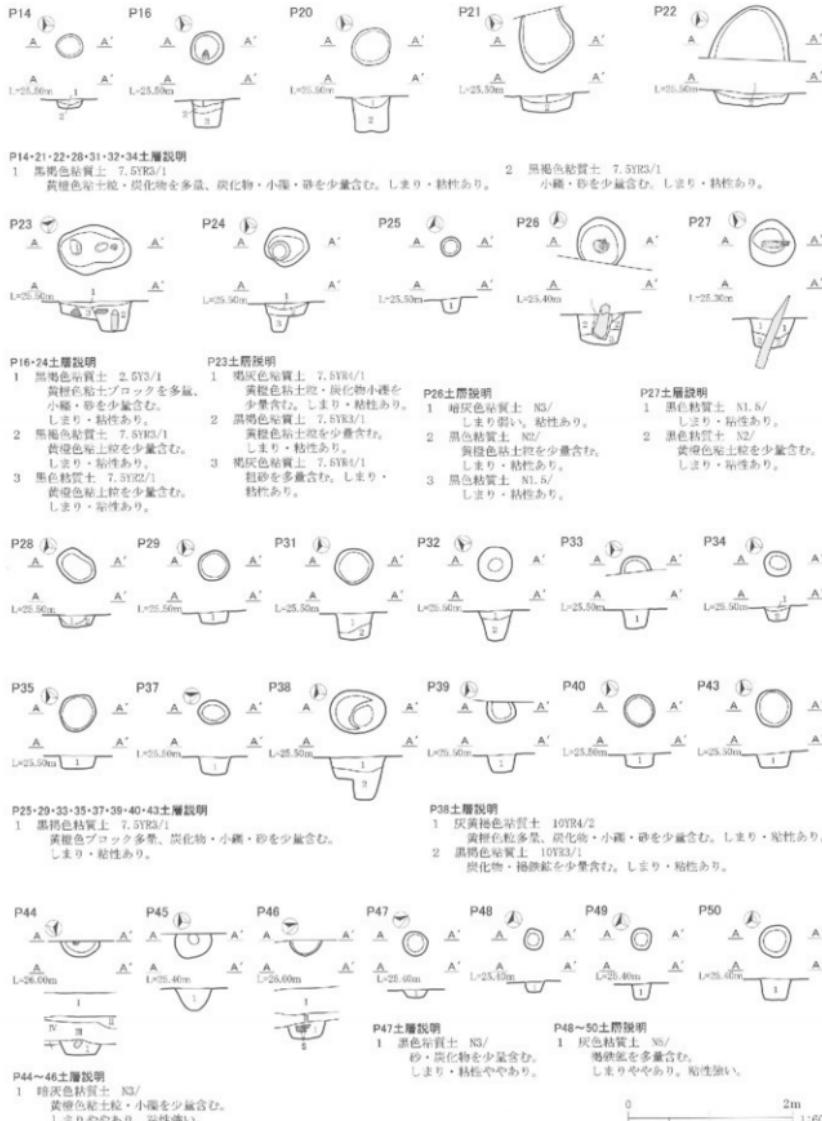
## P09 土層説明

1 褐灰色粘質土 2.5YR4/1  
黄褐色粘土ブロック・炭化物鉄を多量含む。しまりあり。粘性強い。

## P04 土層説明

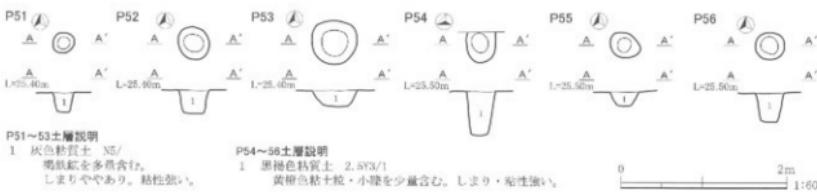
- 1 灰色粘質土 N4/  
粗砂・褐鉄鉄を少量含む。  
しまりやや弱い。粘性強い。
- 2 黑色粘土 N1.5/  
細砂を少量含む。  
しまり弱い。粘性弱い。
- 3 黑色粘土 N2/  
しまりあり。粘性強い。  
a 灰褐色粘質土 3.5/ しまり・粘性強い。  
b 黑色粘土 N2/ しまり・粘性強い。  
c 灰白色砂 N7/ しまり・粘性なし。  
d 黑色粘土 N1.7/ しまり・粘性強い。  
e 褐灰色粘土 5.0R6/ しまり・粘性強い。

第29図 ピット(1)

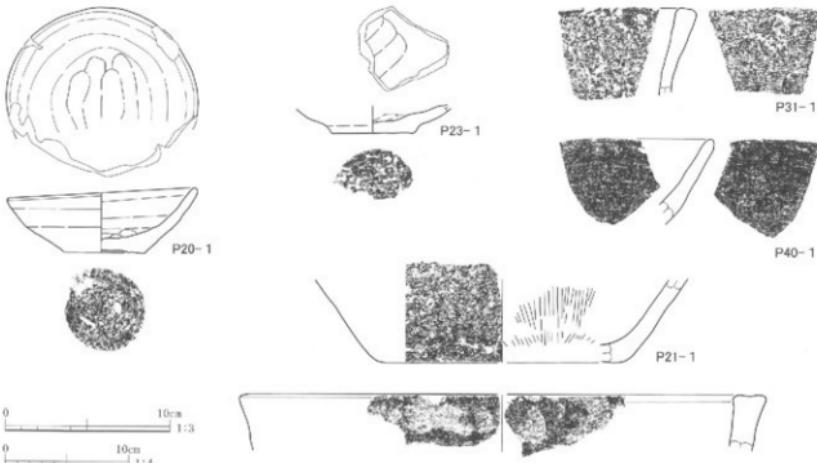


第30図 ピット(2)

は円形ないしは梢円形を呈し、長径が 24 ~ 72 m、短径が 23 ~ 97 m、確認面からの深さが 9 ~ 87 m のものが多い。底面は概ね平坦である。覆土は単層のものと 2 ~ 3 層からなるものが確認される。出土遺物は P 04・20・21・23・31・32・40 から土師質土器、瓦質土器、陶器、瓦の破片がわずかに出土したのみである。ビットは中世あるいは近世に比定され、出土遺物などからその多くは近世宍戸城に付随するものと考えられる。



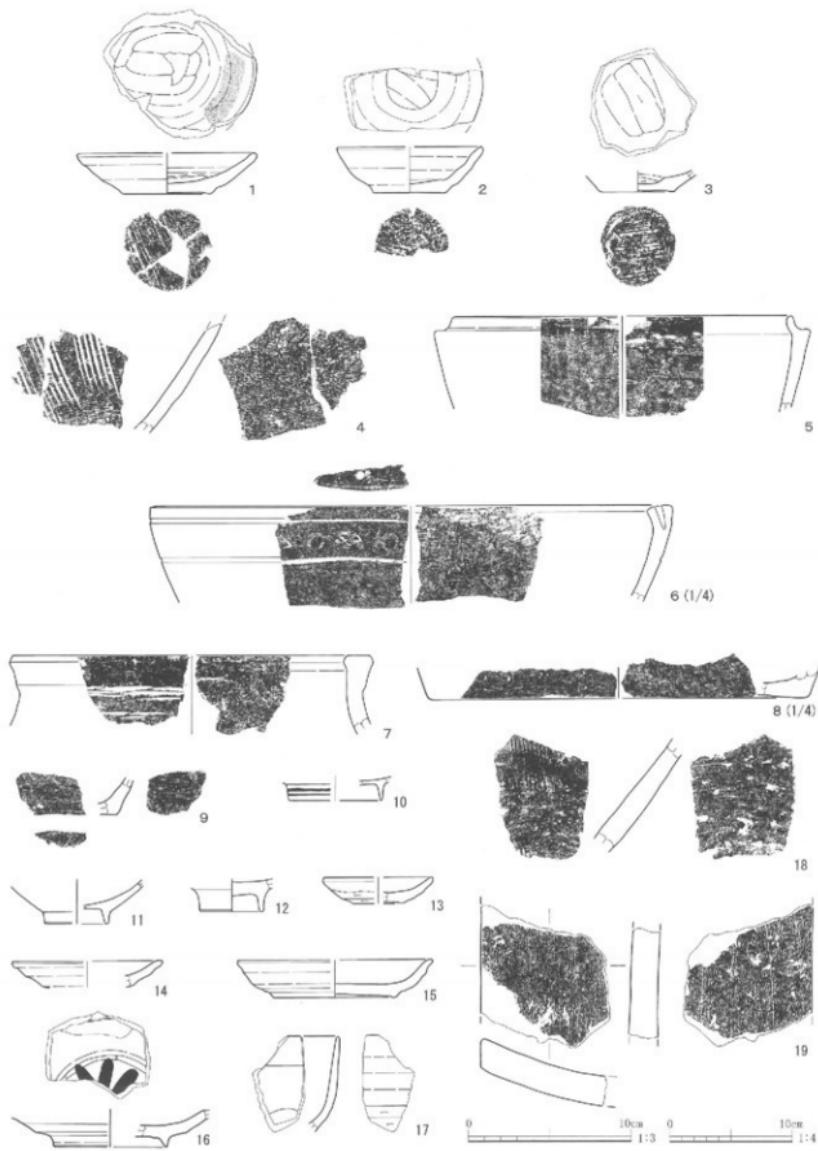
第31図 ピット(3)



第32図 ピット出土遺物

表 14 ピット出土遺物観察表

番号	種別	断面	口径	標高	底径	胎土	色調	焼成	手び・文様の特徴	出土位置	備考
P20 1	土師質 土器	かわらけ	11.5	2.8	6.9	石英・白色粒	褐	普通	ロクロ成形。底部切妻斜め切り。見込み指ナギ。外面部擦耗。	覆土上層	3/4 残存
P21 1	瓦質土器	縦枠	—	[5.1]	(14.6)	泥漿骨針・石英・ 白色粒	に赤い斑紋	普通	外面部底部下部へラケズ。内面7本1 単位の横目。内外面擦耗。	覆土中層	体部底板片
P21 2	瓦質土器	火鉢	—	[4.6]	(42.6)	素身・泥漿骨針・ 石英・白色粒	黒	普通	内外面ナゲ、焼。	覆土中層	口縁部底板
P23 1	土師質 土器	かわらけ	—	[1.7]	(6.0)	金銀粒・赤色粒・ 白色粒	褐	良好	ロクロ成形。底部擦耗。見込み指ナギ。	覆土中層	1/3 残存
P23 1	瓦質土器	火鉢	—	—	—	石英・白色粒	褐	普通	内外面ナゲ、擦耗。	覆土中層	口縁部底板片
P23 1	瓦質土器	縦	—	—	—	雲母・白色粒	灰黒	普通	内外面擦耗ナゲ。	覆土中層	口縫部底板片



第33図 盛土整地層出土遺物

## 第7節 盛土整地層出土遺物（第33図、第15表／写真図版9）

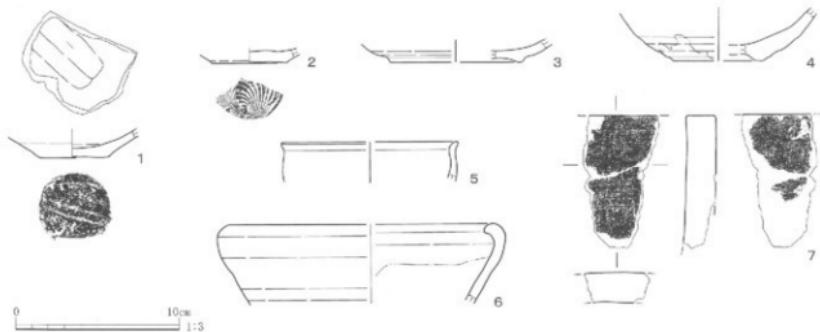
盛土整地層は2区と3区で確認された。遺構確認はこの下面で行うため掘り下げたところ、3区を中心に多くの遺物が出土した。山上遺物は、上師質土器片51点（かわらけ29、擂鉢2、壺20）、瓦質土器片7点（火鉢5、壺1、火消し壺カ1）、陶磁器片16点（碗・皿11、壺2、擂鉢2、灯明皿1）、平瓦1点である。陶磁器は瀬戸・美濃系が多く、第33図15の志野皿、同図16の青磁部鉄絵の折鉢皿等を確認している。

表15 盛土整地層出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	出所・文様の特徴	出土位置	備考
1	上師質 土器	かわらけ	(11.0)	2.5	5.5	角閃石・石英・ 白色粘	に赤い背景	普通	ロクロ成形、底面削り、切妻状 面。見込み指付。内面一部スズ付。	盛土中	2/3残存
2	上師質 土器	かわらけ	(8.9)	2.8	4.6	海綿竹野・白色 粘	灰	普通	ロクロ成形、底面削り、切妻状 面。見込み指付。内面指付。	盛土中	1/4残存
3	上師質 土器	かわらけ	—	[1.3]	4.6	石英・白色粘・ 赤色粘	青黄褐	良好	ロクロ成形、底面削り、切妻状 面。見込み指付。	盛土中	底部
4	上師質 土器	擂鉢	—	—	—	石英・白色粘	褐	普通	外側黒ヶズ。内面右本。単位の解 説。	盛土中	体部破片
5	瓦質土器	火消し壺 A	(20.6)	[5.9]	—	石英・白色粘・ 赤色粘	黑	良好	白縁部。底部削り、切妻状 面など。内面指付。	盛土中	口部・全体 破片
6	瓦質土器	火鉢	(42.9)	[7.9]	—	質物・石英・白 色粘	灰黄	良好	外側黒ヶズ。内面左本。単位の解 説。	盛土中	口部破片
7	瓦質土器	壺	(21.9)	[4.8]	—	溶結骨創・白色 粘	暗褐黄	良好	白縁部。外側黒ヶズ。底部削り、 内面ヘラケズ。	盛土中	口部破片
8	瓦質土器	火鉢カ	—	[2.6]	(31.0)	石英・石英・白 色粘	灰	良好	内外面ナゲ、僅し。底部ナゲ。	盛土中	底部破片
9	上師質 土器	壺カ	—	[2.3]	—	金雲母・白色粘	褐	良好	内外面ナゲ、底部ナゲ。源流寺法か。	盛土中	底部破片
10	器物	柄	—	[1.4]	(3.6)	織物	灰・灰白 物:明青灰	良好	灰付。外側削り、高台付。外縁部に團扇文2条、高台 付部に團扇文1条。	盛土中	高台部1/4 残存
11	器物	柄	—	[2.7]	(3.9)	織物	灰・灰白 物:灰白	良好	内外面透明。	盛土中	体・高台部 1/3残存
12	器物	柄	—	[2.0]	(3.9)	織物	灰・灰白 物:灰白	良好	ロクロ成形。内外面白色油漬。墨付無。	盛土中	高台部1/2 残存
13	陶器	灯明皿	(6.7)	1.6	(3.0)	白色粘	灰・灰白 物:暗褐	良好	みずみず白透かし。内面削り、外外面削 り。外縁部下半削れヘラケズ。底端凹へラケズ。	盛土中	1/3残存
14	陶器	皿	(9.2)	[1.6]	—	白色粘等十 物	灰・灰白 物:灰白	良好	ロクロ成形。内外面灰白油漬。柄付無。	盛土中	口部破片
15	陶器	皿	(13.0)	2.3	(7.5)	白色粘等十 物:灰白	灰・灰白 物:灰白	良好	シラフ内面。内外面墨跡。油漬入。 柄付から最部は剥離。削り出し高台。 手形。	盛土中	1/3残存
16	陶器	折鉢皿	—	[2.3]	(6.9)	白色粘等十 物:灰白	灰黄 物:灰白	良好	ロクロ成形。見込み花枝紋。周縁厚 化の底付。内面削り部砂輪。丸込 み白色粘。外縁部に青磁部鉄絵油 漬。表面ナゲ。	盛土中	体・高台部 1/5残存
17	陶器	瓶	—	—	—	砂粒	灰・灰白 物:灰白	良好	ロクロ成形。内外面透明。外縁部 に墨付。	盛土中	口部破片
18	陶器	擂鉢	—	—	—	黑色粘・白色粘	淡青墨 物:褐色	良好	外縁下部削れヘラケズ。内面16本 の横目。1本の江口不規。	盛土中	底部破片
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	底土	特徴	出土位置	備考	
19	瓦	平瓦	[7.0]	[7.9]	1.8	[146]	石英・白色 粘	凸面ナゲ。内面ナゲ。表面燃し。	盛土中	破片	

## 第8節 遺構外出土遺物（第34図、第16表／写真図版9）

本調査では、遺構内山上遺物のほかに遺構確認時においても遺物が山上している。全て中・近世の遺物で、その内訳は、土師質土器片31点（かわらけ5、内耳鍋5、壺21）、瓦質土器片2点（火鉢）、平瓦1点、陶磁器片10点（碗・皿・鉢・向付）である。



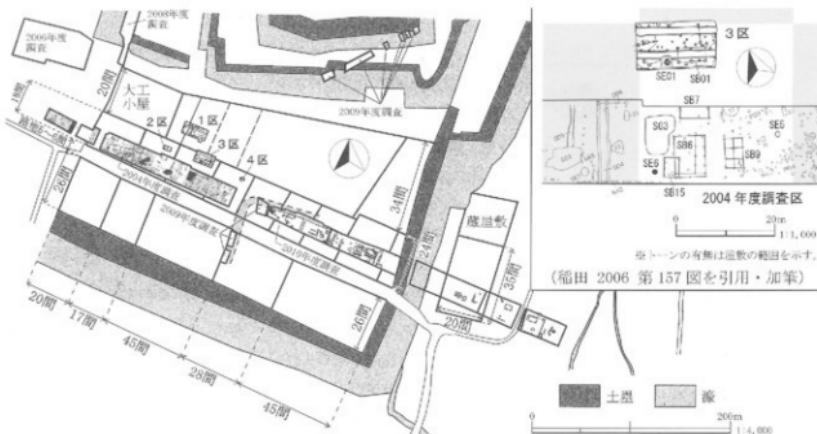
第34図 遺構外出土遺物

表16 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	土師質 土器	かづらけ	—	[1.8]	(4.5)	石製・白色粒	淡黄褐色	良好	ロクロ成形。底部切削・切り→板状压 痕。見込み指ナジ。	1区表土	体～底部 1/2残存
2	陶器	直	—	[0.9]	(4.6)	白色粒・小塊 若干	白：にぶい 赤褐色 粒：灰白	良好	ロクロ成形。底部切削・切り無調整。 内面白色釉。	1区表土	底部1/2残 存
3	陶器	直	—	[1.4]	(8.0)	白色粘土質	白：明黄 粒：灰白	良好	ロクロ成形。内外面共石轴。物貯入。	一括	底部破片
4	陶器	肩付	—	[3.3]	(5.4)	砂粒	白：にぶい実驗 白：にぶい灰白	良好	ロクロ成形。削り出し高台。内外面灰 釉。外面部下端・腰帶へ底部盛起。	3区表土	体～底部 1/4残存
5	陶器	天目茶碗	(10.6)	[2.4]	—	絹毛	白：灰黄 粒：墨	良好	ロクロ成形。内外面斜輪。撇口・美濃系。	一括	口縁部破片
6	陶器	鉢	(16.0)	[4.9]	—	黒色粘土質	白：淡黄 粒：白～灰	良好	ロクロ成形。内外面斜輪。内口縁～体 部上部灰釉。下位青釉。撇口・美濃系。	一括	口縁部破片
番号	種別	漆瓶	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	等級	出土位置	備考	
7	瓦	平瓦	[8.1]	[4.1]	1.8	[68]	石質・ 白色粒	凸面ナジ。凹面ナジ。表面傷。	一括	裏片	

## 第5章　まとめ

今回の調査区を「宍戸城下絵図」に対比させると本丸南側の武家屋敷群に相当し、第35図から1～4区は5つの屋敷地に跨っていることが分かる。特に2～4区は100～300石の家禄を給与されていた家臣の屋敷地で、秋田家中において比較的上級家臣の屋敷となっている。この武家屋敷群は2004年度に財團法人茨城県教育財団で調査されており、各屋敷地内の南北分の様相が明らかにされている。今回調査した3区は、屋敷地内の北側にあたり、2004年度の成果と併せて屋敷地内の空間構成の一端を窺うことができた。3区が該当する屋敷は、石高200石の「山東仁衛門」邸と想定され、絵図では東西（間11）17間、南北（奥行）18間の短冊型の区割りとなっている。屋敷の入口付近には堀掘りの井戸跡（SE6）、池跡（SG3）、倉庫または奉公人の諸所的な機能が想定される建物跡（SB6・15）、倉庫（SB9）が、中央では主屋の可能性が指摘される建物跡（SB7）、奥では建物跡（SB01）、石組の井戸跡（SE01）などが検出された。これらの配置から、屋敷内の空間構成として「南に池や植木などの前庭部を配し、北に主屋などの居住施設を配した」といわゆる「前庭型」の構成をとっていたことが明らかになった（福田 2006）。主屋（SB7）については、今回調査したSB01も含



第35図 武家屋敷区割想定図（塩澤 2011 第136図を引用・加筆）

まれる可能性が考えられる。しかし、仮に同一の場合は桁行が14mとなり、これまでの調査では身舎の桁行10.3m(2004年度調査SB10)を超える建物が確認されていないため、今回は別の建物として扱った。また、井戸跡が2基存在し、前庭部に素掘りの井戸を、「居住施設を配した」奥に石組の井戸を配していた状況も判明した。同様な状況は2006年度に調査された石高200石の「坂田權之助」邸でも確認され、入口付近の素掘り井戸は「馬の飼育をはじめとする生活雑水を供給した可能性」が高く、奥に位置する石組井戸は「より公的な、いわゆる『ハレ』の空間で使用された」という、機能の分化が指摘されている(間宮2006)。

なお、走行方位が「宍戸城下絵図」に記された区画と一致しない溝跡(SD01～03)が検出されており、秋田氏入封以前の宍戸氏または佐竹氏に関わる遺構と想定される。2004年度調査でもこれらの溝跡と同方位を指す建物(SB10・14)が検出されており、近世武家屋敷整備以前の様相を垣間見ることができる。

#### [主要引用・参考文献]

- 宍戸城跡発掘調査報告書
- 稻田義弘 2006 『新宮光寺跡 宍戸城跡』 水戸県教育財团文化財調査報告第256集 水戸県水戸土木事務所・(財)茨城県教育財団閑常正光 2006 『宍戸城跡』 株式会社コメリ・山武考古学研究所
- 宮口忠洋 2009 『宍戸城跡』 笠間市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所
- 森本 宗・大角謙一 2009 『宍戸城跡』 笠間市教育委員会・アイケイトレード株式会社
- 前島嘉人 2009 『宍戸城跡2』 茨城県教育財团文化財調査報告第342集 (財)茨城県教育財団
- 大庭直樹・塩澤佑介・谷 亮・鈴木櫻 2011 『宍戸城跡』 笠間市教育委員会・有限会社勾玉工房Mogi
- 阿久津久(ほか) 1979 『日本城郭体系 第4巻 茨城・栃木・群馬』 新人物往来社
- 茨城県教育委員会 2006 『茨城県遺跡地図(地図版)』
- 稻山義弘 2007 『宍戸城跡出土の生糸陶磁器』『菟政波・川井正一・斎藤弘道・佐藤正好先生追憶記念論集ー』 茅政波の会
- 全国シンポジウム「中世庶民の諸相～生産技術の展開の編年～」実行委員会 2006 『全国シンポジウム 中世庶民の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集・資料集』
- 友部町史編さん委員会 1990 『友部町史』
- 友部町役場・友部町商工会 1971 『友部町百年史』
- 友部町立歴史民俗資料館 2003 『江戸時代の友部地方・宍戸藩・秋田氏と松平氏ー』
- 友部町立歴史民俗資料館 2004 『中世の友部地方ー宍戸・江戸400年の歴史ー』
- 平山植文 1998 『福島県三春城下町出土の脚踏磨』『貿易陶磁研究』第18号 日本貿易陶磁研究会
- 桃崎祐輔 1999 『常陸地域の中世陶磁器と土器』『焼き物に見る中世の世界』 上巻 貝塚ふるさと歴史の広場

# 写 真 図 版





宍戸城跡の位置と周辺の地形（国土交通省国土地理院 2003年12月撮影『真間』）

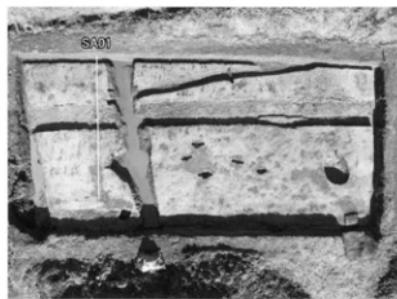


調査区遠景（本調査区より本丸を望む 南から）

## 写真図版 2



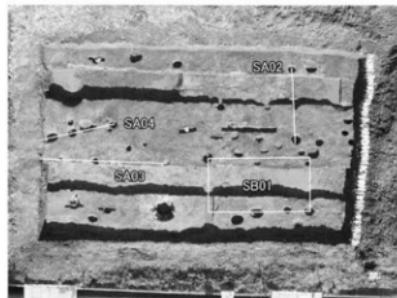
調査区全景（上が北）



1区全景（上が北）



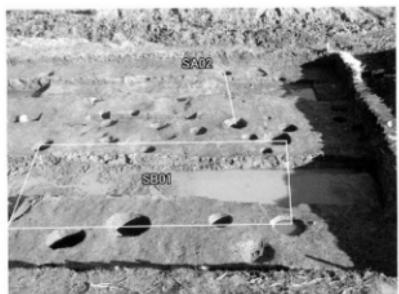
2区全景（西から）



3区全景（上が北）



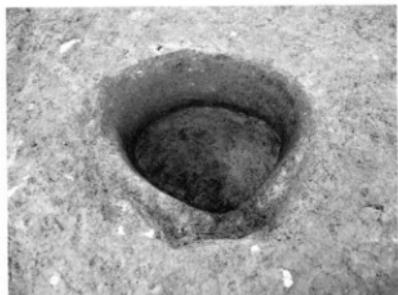
4区全景（北から）



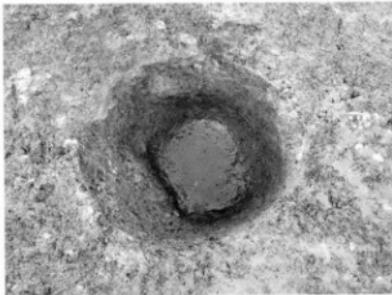
SB01 (南から)



SB01-P5 (南から)



SB01-P3 (南から)



SB01-P2 (南から)



SB02A・B (北から)



SB02A-P1 (東から)



SB02A-P2 (東から)

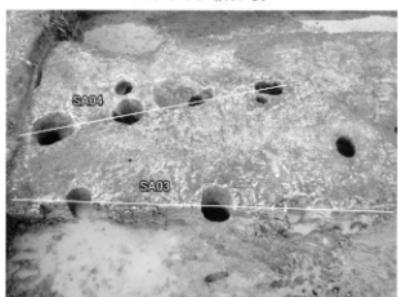
写真図版 4



SB02B-P1 (東から)



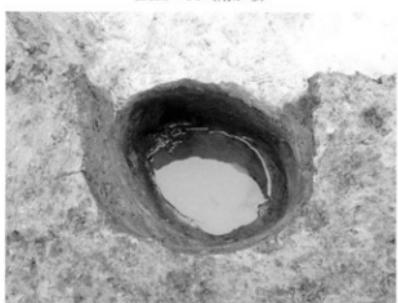
SA02-P1 (北から)



SA03・04 (南から)



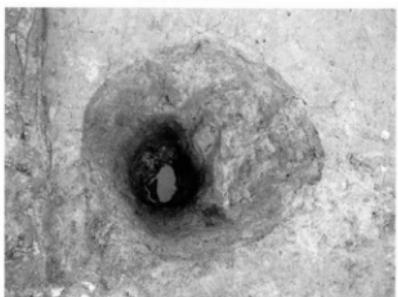
SA03-P1 土層断面 (南から)



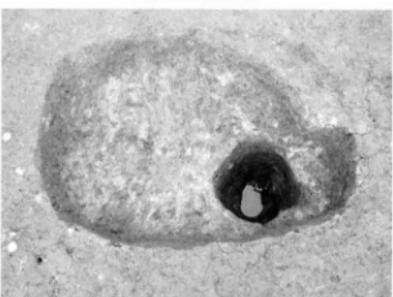
SA03-P3 (南から)



SA04-P4 (南から)



SA04-P1 (南から)



SA04-P3 (南から)



SD01 (南から)



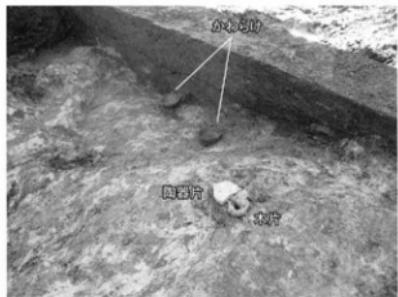
SD01 土層断面 (南から)



SD02 (北から)



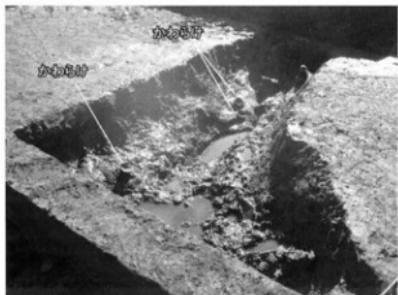
SD02 土層断面 (南から)



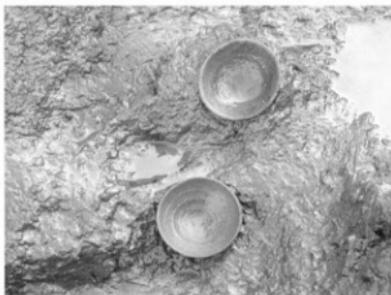
SD02 上層遺物出土状況 (北西から)



SD02 上層遺物出土状況近景 (北から)



SD02 下層遺物出土状況 (北西から)



SD02 下層遺物出土状況近景 (北西から)

## 写真図版 6



SD03 (北東から)



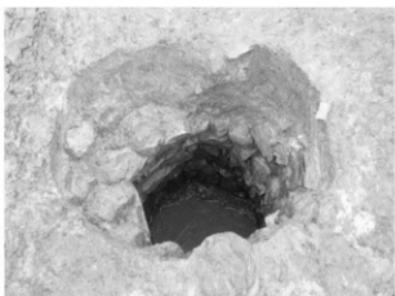
SD03 遺物出土状況近景 (北東から)



SE01 (西から)



SE01 基盤断面 (北から)



SE01 近景 (西から)



SE01 石組近景 (西から)



SK01 (南から)



SK01 土層断面 (東から)



SK02 (西から)



SK02 遺物出土状況 (北から)



P04 (南から)



P04 断ち割り (南から)



P16 土層断面 (南から)



P23 (南から)



P26 土層断面 (北から)



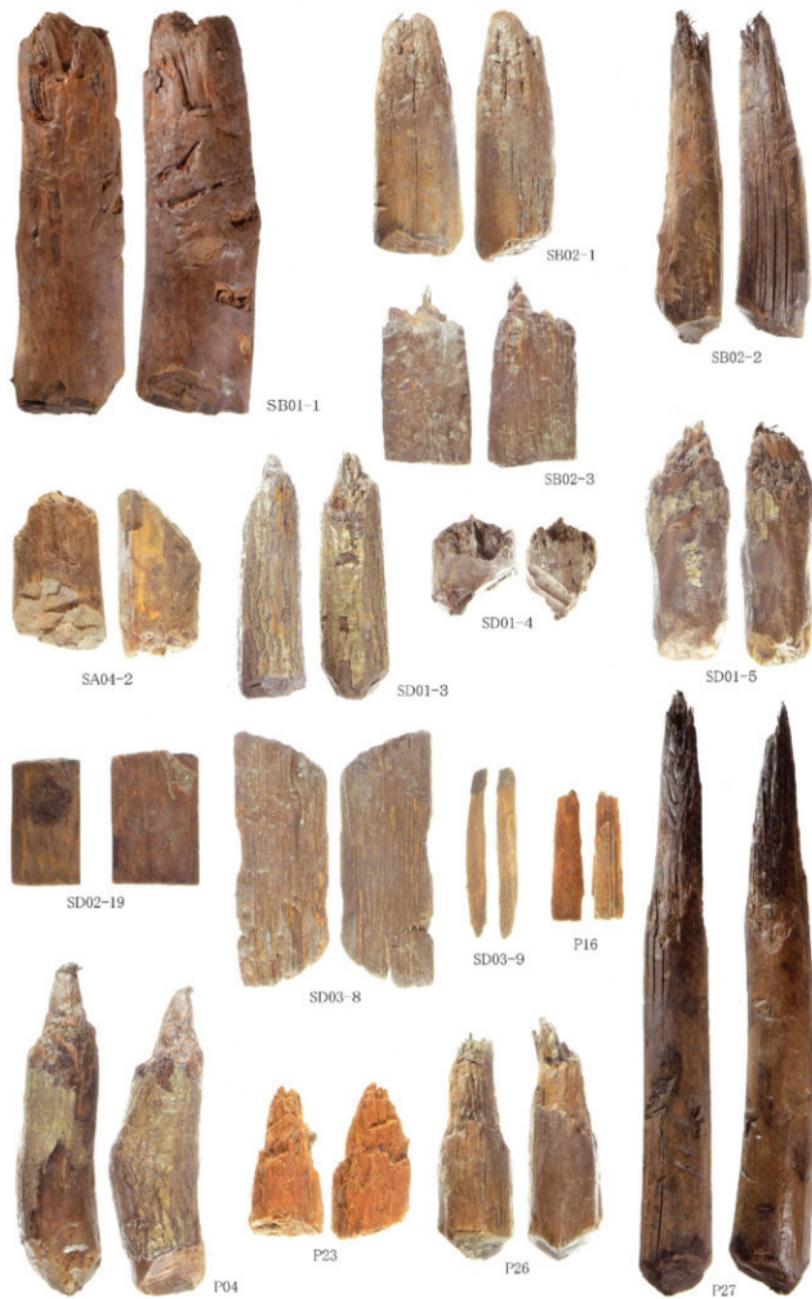
P27 土層断面 (北から)

写真図版 8

出土遺物 (1)







## 報告書抄録

ふりがな	しきじょうあと
著名	宍戸城跡
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	有山 稔世
編集機関	(有)毛野考古学研究所
所在地	〒 379-2146 郡馬駅前橋市公田町 1002番地1
発行年月日	西暦 2012(平成 24) 年 5 月 31 日

所収遺跡	所在地	コード 市町村 連番番号	北 満	東 綏	調査期間	調査面積	調査原因
宍戸城跡	笠明市 平町字殿町 83 1, 84-1, 85-1, 86-1	08321 042	36° 34' 04"	140° 28' 76"	2011.11.17 ~ 2011.12.13	400 m <sup>2</sup>	店舗建設工事に伴う 発掘調査
所収遺物	種別	主な時代	主な造構	主な遺物			特記事項
宍戸城跡	城跡	中世 ~ 近世	獨立建築物跡 2 塔 柱穴列 4 条 溝跡 3 条 井戸跡 1 基 土坑 2 基 ピット 40 基	貿易商礁 (青磁) 瀬戸、美濃系 (天目茶碗・碗・皿・接鉢) 肥前系 (染付碗) 常滑 (斐) 上部質土器 (かわらけ・桶鉢・内耳鉢) 瓦質土器 (壺鉢・火鉢・鍋・火消し盡カ) 漆器 (椀)、古鏡、瓦 石製品 (磯) 木製品 (下駄・柱材・核など) 植物遺体 (紙など) 発泡粘土塊 (鍛冶廻造物カ)	「宍戸城下絵図」で 描かれていた武家屋敷の調査。		

要約	穴戸城跡は近世初期の武家屋敷を中心とする城館跡である。今回の調査では、「宍戸城下絵図」に見られる武家屋敷群の一部が検出された。武家屋敷においては、盛土築造層や石組井戸の周囲に基盤工事が施されている状況が確認され、屋敷骨格の一端が明らかとなった。なお、方位が「宍戸城下絵図」に描かれた区画と一致しない柱穴列や溝跡が検出されており、近世武家屋敷群が整備される以前のものと想定される。
----	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

茨城県笠間市  
宍戸城跡

印刷 平成 24 年 5 月 23 日

発行 平成 24 年 5 月 31 日

編集・発行 有限会社 毛野考古学研究所  
〒 379-2116 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1  
電話 (027) - 265-1804  
FAX (027) - 265-5352

印 刷 朝日印刷工業株式会社  
〒 371-0846 群馬県前橋市元總社町 67 番地  
電話 (027) - 251-1212  
FAX (027) - 253-3475

